

アメリカの対沖縄占領教育政策

大内, 義徳 / OUCHI, Yoshinori

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

257

(終了ページ / End Page)

383

(発行年 / Year)

1995-02-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002703>

アメリカの対沖縄占領教育政策

大内 義 徳

一 沖縄占領の準備・軍政官の養成

教育は元より沖縄の軍政のありようは、軍政官の資質に左右されることが大であった。住民の自治をとり入れようとしたマードック少佐、自治は神話でしかないと言いつつ放ったキャラウェイ中将などその好例である。

沖縄の軍政要員、特にその中枢に居た軍政将校はどのように教育され、どのような教育政策を持って上陸して来たのであろうか。沖縄の軍政に関する準備は太平洋における作戦の変更により急遽着手されたので、教育政策らしいものは無かったというのが結論である。

一九四二年六月ミッドウェイ海戦の大勝を機に米軍は反撃に転じ、日本軍は敗退の道を辿り始めた。

こうした戦局の展開を睨み、米國務省は特別調査課内に東アジア班 (The East Asian Group) を設置、対日占領政策の立案に着手した。ヨーロッパ戦線では米英連合軍が一九四二年十二月、北アフリカに上陸を敢行し、早くも第二次大戦の戦後が始まった。戦局が峠を越すと、軍部は一九四二年五月、バージニア大学に陸軍軍政学校を開設、同年八月コロンビア大学に海軍軍政学校 (Navy School for Military Government and Civil Administration at Columbia University) を設置、軍政官の養成に着手した。しかし対日軍政が本格的に推進されるのは「日本軍政に関する指令案」(一九四三年十月八日付陸軍省) 以降である。これを受け陸軍省は一九四四年夏、ハーバード、エール、ミシガン等主要六大学に極東向け軍政官養成のための民事訓練学校 (Civil Affairs Training School) を開設。更に海軍省は同年九月プリンストン大学に、海軍軍政学校を開設した。ヨーロッパと全く異なる文化・言語のための軍政要員の養成には少なからず困難が予想された。

バージニアとミシガンで訓練されたオアザーク、L. Str. 教授は日本の教育に関し次のように語っている。「軍政学校では六週間が与えられ、日本への上陸が不可欠であり、我々は実戦部隊のあとを継いで法と秩序を再建する軍政チームにあてられるという想定の下に講義を受け、計画・作戦訓練を指導され、さらに陸海軍のフィールドマニュアルを学んだ。ここでは教育についての注意は殆どはらわれなかった。陸軍省のフィールドマニュアル『軍政と民事』(W. D. Field Manual 127-5 Military Government and Civil Affairs) という手引書では、作戦地域司令官スタッフの中に、民事局を創設

することを求めていた。教育に関しては FM27-5 の中で、次のようにいつているだけであった。すなわち民事の任務には「教育制度を監督すること、学校の開校ならびに破壊的で有害な教育の防止」という内容が含まれよう。

我々はまた陸軍省の基本フィールド・マニュアル『野戦の規定』(W. D. Basic Field Manual 27-10, Rules Land Warfare) や『野戦統治の協定』(W. D. FM 27-231 Treaties of Governing Land Warfare) について学び、試験された。——略——ミシガン民事訓練学校での我々の関心は、本来さまざまな応用的な実習と結びついた日本語と日本の地域研究にあった。私のミシガン大学での成績証明書は一学期週二十六時間を表記しているが、その内十四時間が日本語、六時間が日本地域研究、そして残り六時間が日本軍政についてである。」

バージニア陸軍 S.M.G では教育に関して、ほとんど何も学ばなかった。コロンビア S.M.G も大同小異であった。沖縄の海軍軍政府将校の大半はコロンビア S.M.G で養成されたので、ハリレーの先行研究を中心に、コロンビアを調見する。一クラスの構成は平均四十名。九ヶ月の徹底した集中訓練で、やはり日本語教育に多くの時間があてられている。一九四三年十月から十月九日までの授業科目と時間数は次のようになっている。国際法(四時間)、日本語(十一時間)、日本語作文(一時間)、行政(三時間)、政治(二時間)、地理(三時間)、集団討議(一時間半)、夕食時の討議(三時間)。

教科内容は国際法、民事行政の組織と方法、軍政下の警察司法、経済および財政、占領予定地の歴

史、地理、住民および習慣、熱帯地衛生、福祉など広範囲にわたり、軍事訓練は一切なく授業は極めてアカデミックであったという。生徒の質は高く、博士号をもった大学教授、下院議員、市長、都市計画、エンジニアリング、建築などで一流と目される人々で占められた。

教授陣としてはCATSで教えたというから東アジア班のユージン・ドーマンらも教壇に立ったであろう。フィリップ・ジャセップ Philip Jessup (国際法)、ナサニエル・ポーター (Nathaniel Peter (アジア史)、イチロウ・シラト白戸一郎・婦米二世 (日本語)、ジョージ・カー George H. Kerr (台湾関係)らの名前が記憶されている。

次の方々は、いずれもコロンビアSMGで訓練された。

GHQ/SCAP C. I&E

W. K. ブンズ William Kenneth Bunce 博士 (一九九四年九月よりプリンストンSMG)

R. K. ホール Robert King Hall博士 (右と同)

A. クロフト Alfred Crofts 中士

沖繩海軍軍政府

J. T. ワトキンス James T. Watkins IV 博士

W. A. ハンナ Williard Armstrong Hanna博士

W. H. ローレンス William Henry Laurence

生徒は日本及び台湾・沖縄・小笠原等コースに分けられ訓練された。ワトキンス、ハンナ、ローレンスは台湾・沖縄コースで訓練された。訓練の様子をワトキンス博士は次のように述べている。「ひろく人類学と呼ばれる科目が実用に重点を置いて、幾通もある。この面の訓練は海軍にとって最大関心事の地域、つまり多種多様な人びとが沢山の島々に散らばっている西太平洋に焦点を当て、いる。この地域の習慣や人種や制度は民政訓練の最重要事項である。」さらに「全部で九ヶ月間の訓練のうち、最初の三ヶ月間は未開東洋人の心理、習慣、社会組織の学習が中心で、また全期間をとおして、その土地の言葉の習得にきつい日程が組まれていた。」日本コースで白戸一郎から日本語を習ったトリリンガルのホールさえ日本語には音を上げた。「十一ヶ月の一对一の指導を受けた。当時としては非常に集中的なもの。ここで言うておく必要があるが、それは全く日本語会話で、文字の方の知識は非常に限りだった。私はいつも通訳なり、その方面の訓練を受けた言語将校の助けを借りないと駄目だった。」

のちに沖繩海軍軍政府文教科長になるハンナ大尉はコロンビアSMGで、教育について何も学ばなかったようである。なぜなら一九四四年九月にプリンストンSMGのカリキュラム立案を命じられたホール大尉は二十三単位、二百十三時間(一九四四、九、一九四五、三)の中に教育に関する科目を設けることが出来ず、その他の二百四十時間によく一単位、九十分しか加えられなかったと不満をもらしていることから察せられる。

S M GとC A T Sで生徒は「軍政および民政に関する米陸海軍マニュアル」W. D. FM-27-5 U. S. Army and Navy Manual of Military Government and Civil Affairs (1943. 3)を学んだ。その「民政ハンドブック」Civil Affairs Handbook (23, June, 1964)で各分野における基本事項を学んだ。「日本」の第十五巻が教育 Section: 15 Educationであり、これはO S Sのガリック夫人 Frances A. Gulick 起草の Japanese Administration: Department of Education R&A 1330 (6 June, 1994)である。ワンダリック Herbert J. Wunderlichもオアも覚えており、「CATSは軍政学校よりも多く教育に注意を払っていた。我々は文部省の組織、権力、機能ならびに学校制度の一般的構造について学習した。我々の注意は、特に政治的教化の手段、高度に集権化された教育制度や利用されている問題に注がれた」とオア教授は語っている。第十五巻はオア教授が適切にまとめているように、実態分析に主眼がおかれ、軍政官がとるべき具体的指針は何一つ示されていない。民政ハンドブックは府県ごとに作られ、沖縄県のものも作られたといわれる。

ワトキンス、ハンナ等は沖縄研究一『日本少数民族としての沖縄』、沖縄研究二「沖縄人たちの特徴」(16 March 1944. (戦略局ホノルル支局)を学んだ。

沖縄人観は後述するが日本人に対しジャップという侮蔑語を使う者は教師も生徒も誰ひとりなく、むしろその反対であるとホールは証言しているが、オアもワンダリックも同様な発言をしている。実際に、そこで訓練を受けたW・H・ローレンス師はコロンビアS M Gについて次のように語っている。

ローレンス パールハーバー攻撃があつて、海軍に志願したら、バージニア州ノーフォークに配属されました。ある時、ワシントンから軍政官募集の案内が来たので応募しました。その後、たまたま用事でワシントンに行った際、希望を述べました。市長経験者が欲しい。お前には資格がないといつて断られました。何度も粘りましたら、後日コロンビアに出頭せよと命令が来たのです。

一 コロンビアには何人ぐらい生徒がいましたか。

ローレンス 四、五十人ぐらい。我々はコロンビア大学 (Graduate school of Columbia)を占領してしまいました。極東に関するコロンビア大学の最高権威者が教壇に立ちました。それぞれの分野の専門家が多数集められ、東洋について教えました。政治組織、文化など急造のプログラムでしたが優れた内容でした。コロンビアだけでなくスタンフォード、コロラド、プリンストンにもありました。

一 ノース・ウエスタン、シカゴにも。

ローレンス 陸軍もやっていましたが、コロンビアは我々海軍だけ。六ヶ月後の十一月にボルダ (Navy Language School of Boulder. 海軍日本語学校、コロラド大学)に送られて訓練を受けていたら、引き抜かれて、今度はカルフォルニアのフォード・オード Ford Ordに送られました。コロンビアでは台湾について勉強しました。台湾の専門家が集められ、我々も台湾のエキスパートになりました。カー George H. Kerrが台湾について教えてくれました。彼の書いた物も読みました。戦後一度会いましたが、彼は台湾に関する生き字引きで、こまごまとした事まで記録していました。のちに台湾に

いったとき、まるで前に一度来たことがあるように感じました。

台湾だけでなく日本全般と中国について勉強しました。私は日本セクションに決まっていますが、中国に興味があったので校長に頼んだらOK、運よく中国セクションに入りました。日本と中国を半分ずつやるようにして貰ったんですが、中国語に打ち込みました。中国と台湾の歴史も勉強しました。コロンビアでは沖繩の的を絞っていませんでした。日本プロパーです。討議の時間に大変高度な課題が出されました。その一つが天皇のこと。天皇をどう扱うべきか討論しました。

—カーはワトキンスとハンナをとったといっていますますが、ハンナさんと一緒でしたか

ローレンス いや、彼とは沖繩で知り合いました。カーは台湾に関するあらゆることに係わっていました。ワトキンスも一緒に、カーは教授陣の中でも傑出していました。

—ほかにどんな人がいました。マードック？

ローレンス マードック。もっと有名な人、ジャセップ。国際法のNo.1でのちに国連の〔国際司法〕裁判所の判事になりました。他の人の名前は忘れましたが中国のエクスパートや、多数の宣教師が中国、台湾の言葉、習慣、歴史などを教えました。台湾あるいは南支那が攻略目標ということでしたから。

註

1. マーク・オア土持ゲリー法一訳『占領下日本の教育政策』玉川大学出版部（一九九三年一月二十日）二四一—二五頁
2. ハリー・レイ『東京へ至る道のり』On the Way to Tokyo 「戦後教育史研究 第七号」明星大学 平成二一年九月二十五日 二一六頁
3. 大田昌秀「沖繩の挑戦」恒文社（一九九〇年九月七日）一一〇頁、大田はとくに断っていないがコロンビアSMGの科目である。この時点でプリンスストンは開校していない。
4. 鹿野政直「戦後沖繩の思想像」朝日新聞社（一九八七年十月十五日）二四頁
5. ハリー・レイ『オーラルヒストリーシリーズ—ロバート・キング・ホール』占領教育史研究 明星大学（昭和六十一年六月三十日）一一〇頁
6. マーク・オア 前掲書 二五頁コロンビアやバージニアSMGで教育に関し殆ど何も学ばなかったのはテキストが完成していなかったからである。CATSには間に合った。国務省が対日教育政策の検討を始めたのは一九九四年二月四日以降である。
7. ハリー・レイ（昭和六十一年六月）一一一頁
8. W. H. ローレンス神父 (William Henry Laurence) 元海軍少佐、軍政府経済部長
9. 国務省極東関係者は言うに及ばず、IPRR会員のジョン・マスランド（スタンフォード大CATS）フィリップ・ジェセップ（コロンビア大SMG）、ジョン・エンブリ、ジョン・エマーソン（ノース・ウエスタン大CATS）で講義をしている。さらに漱石の門下生サージ・エリセエフがハーバードで日本語、日本文化の講義をした。

二 沖繩軍政計画及び教育計画

一九四三年カイロ会談の席上、ルースベルト米大統領とチャーチル英首相との間で米英連合軍による太平洋地域での戦争遂行計画がとり上げられた。席上攻撃目標の一つとして沖繩もあげられたが主目標は台湾とされた。

一九四四年三月米統合参謀本部は太平洋地域司令長官チエスター・ニミッツ提督 Rear Admiral
Chaster W. Nimitz Commander in Chief Pacific Fleet に対し台湾侵攻作戦 "Operation Causeway"
の準備を命じた。台湾侵攻は一九四五年一月と決定された。

ニミッツの指揮のもと実戦部隊は作戦計画を進めていた。他方軍政計画にも拍車がかかっていた。
コードウェル John F. Caldwellの記録がある。

沖繩の軍政計画は、一九四四年夏に、海軍士官たちの三つのグループの活動に起源をもっている。
第一は、エール大学の人類学教授である海軍少佐ジョージ・P. マードック George P. Murdock
のグループで、西太平洋の日本領および委任統治領の島々についての民政の手引きの作成に従事して
いた。

第二は、さきの台北領事館員である海軍大尉ジョージ・H. ケア George H. Kerrのグループで台
湾についての民政手引きを準備しつゝあった。第三は大学の学部長だったマルコム・S. マクリーン

Malcom S. Macleanのグループで、彼らはペンタゴンで台湾に軍政を布く場合の予備的計画をつくり
つゝあった。彼らの大部分はコロンビア大学の海軍軍政学校の出身で、東南アジアについての知識を
そなえ、また軍政についての専門的な資格をもっていた。

三つのグループは「上手道作戦」が発せられて間もなく、作業を始めたものと思われる。ワンダ
リックは五月二十九日ワシントン勤務を命じられたが「マクリーンは海陸軍将校からなる小さなグ
ループを組織、台湾占領に関する計画の指揮をとっていた。といっている。

コロンビアではカーのもと、ワトキンス、ハンナ、ホールらが台湾の軍政計画に従事していた。ワ
トキンスは政治学、ハンナは英文学が専門でともに教育学に無縁であり、教育を担当したのはホール
に違いない。ホールは一九四二年シガン大学から比較教育学の博士号を取得、抜群の力量と押し
強さは衆目の一致するところであった。彼自身「私のやった多くの計画の仕事の内、実現しなかつた
のは台湾侵攻計画である」と語っている。

米機動部隊はマリアナおよびパラオ諸島を占領、作戦は急テンポで展開し、「上手道作戦」計画が
急がれた。台湾攻略の担当は第十陸軍とされ、同軍は一九四四年夏、Fort Sam (テキサス) からハワ
イ・オアフ島に移った。指揮官には陸軍中将サイモンB. バックナー Lt. General, Simon Bolivar
Bucknerが命じられた。バックナーはスコップフィールド第十軍司令部内に軍政課を設置、マクリーン
を課長に任命、台湾の軍政計画を促進させた。彼の下にはコロンビアSMGで九ヶ月の訓練を終えた、

ワトキンス、ハンナ、バンスら十五名の海軍将校と四名の陸軍将校が配属された。マクリーン課長は病気がちで結局更迭され、十一月一日付でクリスト陸軍准将校 Brigadier General William E. Christ が着任。新たにクリストの指揮の下、台湾から沖繩へ、軍政計画の改訂作業が進められることになる。以下ハンナ博士とローレンス師の証言を中心に沖繩の軍政・教育計画を跡づける。

クリストは着任早々十二名の計画スタッフに台湾の軍政即ち政治・治安・経済・農業・教育・産業等に関する計画を立案するよう、さしたる前置もなく命じた。我々はこの命令に大いに困惑した。なぜならだれひとりとして軍政計画立案の経験がなく、軍政府組織に関しても明確な考えを持っていなかったからである。

私は台湾の「言語と教育」を課せられた。台湾の言語事情は複雑で一筋縄ではいかないので、その旨クリストに釈明した。

二、三週間後、我々はクリストに計画を提出した。ところが、「どれもこれもまともなものはない。こんなもの使える訳がない」と文句を言われ、直ちにやり直しを命じられた。しかしクリストはその後一度と台湾軍政計画を口に出さなかった。そこで我々は思い思いに水泳、釣、ゴルフ、山登りを楽しんだ。

クリストが台湾に触れなくなったのは、それなりの事情があったからである。それは南太平洋の戦局が急速に展開していき、もはや台湾が不要となり、沖繩か、あわよくば九州が新しい目標に変わって

きたからであろう。

沖繩侵攻は極秘とされ、一九四五年二月二十五日の乗艦直前まで軍政課スタッフさえにも知らされなかった。しかし噂で、うすうす知っていたので沖繩と聞かされても、誰一人驚かなかった。「民政ハンドブック」は十二月末に配布されたが極秘のスタンプが押ししており、読むことは禁止されていた。三百五十頁もあり、いざ乗艦となったとき、私物で一杯になり、ハンドブックを詰めこむスペースがなかった。

ハンナ博士はいう、「沖繩軍政計画、それは実体のない空虚な幻想 (empty fantasy) に過ぎない。欠陥だらけで使えないとこきおろされ、一度は投げ出された素人の手になる台湾軍政計画の二番煎以外の何物でもなかった」。

ハンナ博士の証言は額面どおりに受けとれない。なぜなら台湾軍政計画には、ほゞ六ヶ月あてられ、計画は八分どおり出来ていたと考えられるからである。クリストに計画を命じられ、全員がうまくいかなかったとは信じられない。

クリスト准将が指揮官としての資質を欠いていたせい、海軍将校が相次いで転属願いを出し、その補充でゴタゴタし、計画もうまくいかなかったのであろう。いずれにせよ、ハンナ大尉の計画は不合格であった。大尉は言葉将校として白人将校やハワイで召集した百名の日系兵に日本語を教えていたので、急に台湾の教育について立案せよと命令されても、それは出来ない相談であった。

そうこうしているうちにマードック少佐のグループも加わり、軍政課は機能をとり戻し、新しい陣容で沖縄軍政計画に着手し、「L Day」(三月一日)に向け改訂作業を急いだ。軍政課は、すでに刊行されていた「琉球列島の沖縄・日本の少数民族」"The Okinawans of the Loo Choo [Ryuku] Islands: a Japanese minority group [In Japan and Hawaii]" 1/6/1944⁴⁾ 送付されたばかりの「民政ハンドブック」"Civil Affairs Handbook of Ryuku [Loo Choo] Islands" 15/12/1944 の二冊のテキストに基づき、作戦指令第七号 "Operation Directive No.7" 6/1/1945 とその詳細な手引書「実施要綱」"Technical Bulletin" 25/2/1945 Headquarters, Tenth Army Military Government Section を作成。最後にニミツ司令官はバックナ中将に「西南諸島及び周辺海域の占領下諸島における軍政のための政治・経済、財政に関する指令」"Political, Economical and Financial Directive for Military Government in the Occupied Islands of the Nan Sei and Adjacent Waters" 1/3/1945 を発し軍政計画を完了した。

ホール大尉が立案し、ハン大尉が改訂した「教育」は Technical Bulletin の III 統治 3 情報、C 文化的制度がそれである。以下その全文をあげる。

分遣隊や地区の上級軍政府将校は、次のことについて責任を負わねばならない。

(a) 学校の閉鎖

占領時には活動中のどの学校も閉鎖されること。最高本部の許可なしには、いかなる学校の再開も

許されてはならない。

(b) 有用な学校財産確保の報告

種々の軍政目的に合った建物の利用を決定するため、報告書はより多くの有用な学校財産について把握を行うこと。これらの報告書は、元の形を留めている建物や施設がどのくらいあるか、またもしあれば現在使用状況がどうかを明らかにすること。

(c) 児童の緊急計画の準備

許可が出されてから児童に対する活動の緊急計画は、次の幾つかの原則に従って制定されること。

一、地元民が計画を作成し、実施すること。教育経験のある三人或はそれ以上の者が各地区毎に委員に任命され、計画に着手し、軍政府規則に合致させるよう責任を負うこと。

二、上級軍政府将校によって任命された軍政府将校は、総合的な管理権を行使し、種々の地区計画を調整すること。彼らは教育委員を任命し、計画立案につきこれら委員に助言し、援助すること。彼らは規則が守られていることを確認するために十分な調査を行い、校舎や教師の支給品や必要な資金の調達を援助すること。

三、日本の教育制度のあらゆる国家主義的特徴は禁止されること。修身や道徳の授業、神道の儀式、東京へ向って礼をする儀礼は禁止されること。問題のある部分は使用中の教科書から削除されること。

四、計画はまず民間人収容所内の初等学校段階の児童を対象に着手され、そして状況次第で年長児

童や収容所外の児童をも対象にするよう許可を拡げること。計画の教育的部分は主に読み、書き、算数に限られるが、衛生、娯楽、職業訓練に関する他の活動は、特に早期段階の間、最重要とはいわぬまでも重要な役割を果たすのである。

(d) 他の教育活動の準備

上級軍政府将校は、更に進んだ恒久的性格の他の教育活動を準備すること。これらの活動は次のものを含んでいる。

一、成人教室

民間収容所内であるか否とにかかわらず、言語や職業訓練の如き成人教室は児童の活動に対してと同様の一般規則に従って編成される。

二、軍政府雇員訓練のための特別コース

特別コースは事務員、通訳、教師、その他の職種で、軍政府機関において働く民間人訓練のため開設される。

三、正規の教育制度の再建

軍政府副長官によって許可されたとき、教育の正規の制度が再建される。児童のための緊急計画確立に関して、先に略述した最初の三つの一般的原则は、正規の教育計画にも同様にあてはまる。制度は初等段階から始まり、十分な統制がなされ得ると思われる範囲で拡大されること。

(c) 三は戦後GHQ/SCAPが日本政府に発した指令と同じである。Technical Bulletinの作成にあたり、ハンナ大尉が依頼した文書はH. ローリー起草「軍政下における教育制度 CAC-238-PHC-287 "The Education System under Military Government" 6/11/1944 である。とくにIV勧告4、8および9がそのまゝとり入れられている。ローリー文書はCATSでもテキストとして使われたという。またホール、ハンナ両大尉はIPRRの機関紙 "Pacific Affairs" に掲載されたスピックスCharles Nelson Spinks の「日本青少年の教化と再教育」(一九四四年三月)を参照した筈である。

一 コロンビアのあとハワイへ行ったのですか

ローレンス いゝえ。カルフォルニヤフォート・オード Fort Ord に送られました。各地から兵を集めて編成したので、半分が陸軍他の半分が海軍でした。侵攻にそなえて射撃などの戦闘訓練も受けました。

一 なるほど軍政将校でも軍人ですからねえ。

ローレンス 軍政将校のまえに海軍軍人です。

一 いつ乗艦しましたか

ローレンス 多分二月だと思えます。一ヶ月ほどガタルカナルにいました。夜は夜間訓練に出て、日中はガタルカナルに戻るといふ訓練を二週間やりました。

一 沖繩侵攻はいつ知らされましたか

ローレンス 艦の上で。小冊子が配られました。沖繩について何もかも書いてあります。その冊子は陸軍が用意したものです。陸軍はすべてに関し、ブックレットを準備していました。上層部ではいろいろ計画があったのでしよう。台湾から沖繩に変更して、とにかく充分時間をかけて作ったのでしよう。とても良く出来て、内容も正確です。

日本語の本を渡され、兵隊に日本語を教えよと命令されました。二十名ぐらいいたかな。私は日本語の勉強はしたことないのに。その本も陸軍が用意したものです。

— 表紙の赤いやつでしょう。それとも長沼かな。

ローレンス いいえエル大学の女性が書いた、とてもいい本で今も使われています。読み方から始めました。「オハヨゴザイマス。ナメナンデスカ」

— 中国語をやったのに、日本語を教えろって無茶ですね。

ローレンス そこが海軍です。

— 最初の一週間の計画をたてたとおっしゃいましたが、どこで立てたのですか。

ローレンス 艦の上で。沖繩侵攻一週間前になってやれと命令されました。始めは不可能と思いましたがやりました。コロンビアで色々計画したし、侵攻したらどうすべきか訓練を受けていましたし、私にはバックランドがあり常識も。その頃には、どんな援助物資を積んでいるか。沖繩人とはどういう人達か。世話をする沖繩人の数、十万人などについて分っていました。

ハンナ、ローレンス両氏の証言からすると、沖繩軍政計画はどう最目で見ようと拙速であった。

Technical Bulletinは乗艦する軍政将校の手許に届いていなかった。沖繩侵攻の日時“L Day”を知らされのは乗艦真際か太平洋上であった。また現地直接侵攻に従事することになる軍政将校は僅か一、二ヶ月しか準備期間がなかった。

注

1. ビーニス、M. フランク加登川幸太郎訳『沖繩』サンケイ新聞社出版局（昭四十六年六月二十八日）十一—十三頁
2. 鹿野政直『戦後沖繩の思想像』朝日新聞社（一九八七年十月十五日）二十三—二十五頁
3. ハーバート、J. ワンダリック『日本占領の思い出』『占領教育史研究』明星大学（昭和六十年七月）
4. W. A. ハンナ 一九九一年八月一日那覇市での講演メモ（以下 Hanna 1991. 8. 1）
5. 川井勇「占領と米軍の教育政策に関する一考察」九州教育学会研究紀要第十一巻 九十九—百頁
6. 一九九三年五月二十日面接、なお沖繩侵攻作戦時の予測については太田（一九九〇年九月） 二百三十三頁

三、軍政府の樹立

— いつどこで、どんなふうにして軍政府がスタートしたんですか。

ローレンス 侵攻は四月一日、イースタンサンデイの素晴らしい天気でした。戦闘は予想以上にうま

くいき屋前に飛行場を奪取しました。飛行場は二つありましたね。

— はい、嘉手納と読谷

ローレンス そう。最初に読谷、次に嘉手納をとりました。翌朝、直ちにデッキに集合せよと命令が出ました。

— 四月二日のことですね。

ローレンス そう。私は七日に上陸予定でした。私と組んでいた海軍将校が、海岸で万事とり仕切り、私は艦上の予定でした。八時に指揮官がやって来て、「彼は何処か」と言うんです。奴さん居ない。

「探してこい」と言われ、行ってみたらまだ眠っているんです。私は全部着装し、海兵のようにカービン銃45と毛布など

— Marine!

ローレンス Yes, sir. 指揮官にその旨報告したら「じゃ、貴官はどうかね」というので彼に代ったのです。指揮官とセイラーと私の三名で上陸用舟艇に乗り込み、トラックを一台積んで何事もなく上陸しました。 That was the invasion.

— 軍政府の樹立は四月五日あるいは一日といわれますが（一日は大内の思い違い）

ローレンス 四月一日 何かセットアップしたかも。なにせ大きな作戦でしたから。

— 四月一日 布告第一号が発せられたとしても、一日は疑問です。

ローレンス 私は確信が持てません。我々の前に、私はそう思いませんが。聞いたこともありません。

— ハンナ博士は三日に上陸し、コザで始めたと言っています

ローレンス Sand... コザは我々が最初に駐留した所です。我々は、とある家を奪取しました。置がはがされ、床がむき出しでしたが毛布を持っていったから大丈夫でした。隣の家がアニーパイルで、彼と知り合いになりました。知ってのとおり戦死しました。

— 伊江島で戦死しましたね。彼のことを知っている日本人は多いですよ。東京にアニーパイル劇場っていうのがありました。誰からも好かれていましたね。彼と知り合いだったのですか。

ローレンス 通り一つ隔てた所にいました。 That's another story. 上陸してトラックを島の中に進めました。麦畑だったと記憶しています。我々はトラックの下で寝ました。二、三日して、コザに行き今いった家を見つめました。あとになって丘の上に移りました。海が全部見渡せ、カミカゼが海に突っ込むのが見えました。

— 日本は必死に攻撃しました。特攻機で。

ローレンス とにかく海岸に着き、生き抜きました。一つの劇的な事件。あの軍医と看護兵たち
— Cチームの？

ローレンス 我々の代りに壕にはいっていたのに運悪く外に出たとき、カミカゼが頭上に飛来し、彼らに機銃投射を浴びせ殺傷してしまっただけ。一大悲劇でした。

— You were under General...

ローレンス Christ

— クリストはハンナの話ではあまり好かれていませんでしたね。有能ではなかったようです。

ローレンス 彼はい、リーダーじゃなかった。敬意を抱かせなかった。一つ覚えています。臆病だった。將軍・指揮官というのは勇気がなければならぬでしょう。でも彼はそう思われていなかった。沖繩についてどう考えていたか分かりませんが、経済をどうするか、その計画を立てるにあたり、彼とかわるようになりました。

— 最初の七日間で救済計画をたてましたね。食糧の供給や医療など。沖繩侵攻で真先にやったことは。

ローレンス 救援物資の陸揚です。ドボンと落しました。

— 放っぽって？

ローレンス 艦から海へドンドン落としました。…おかしな事がありました。軍政担当の海軍大佐と我々の指揮官の三人で難民キャンプ設置場所を探しに、ジープを走らせていたら、突如平坦な所に出ました。そこは田圃で家が二、三軒ある村落でした。海兵大佐が言いました。「あそこまで歩いて行く。頑張れ！あそこが我々の本部だ。こちらが難民キャンプだ。オキナワンが来たたら面倒みよ。」

「大尉、君はここに残れ。我々はキャンプに戻り、応援を呼ぶ。」とい、発電機をおろし、発電機と

私を置いて帰ってしまいました。

— たった一人で置き去り。

ローレンス 田圃の真中に腰をおろしていました。小高い丘に家が二、三軒。沖繩戦で一番怖った。女の人の家から出たと思ったらパッと逃げました。怖ったのですが、私の方が、もっと怖った。

二、三日して日本兵を発見、壕で。彼等はどのようにして撃ってこなかったのか。私が畏にはまったと思ったらしい。とにかく怖った。監視されて一人で。そこでスタートしました。ひどい所、田圃の真中でしょう。

— 田圃の真中で軍政府をスタートさせたんですか。

ローレンス はい。乾季なら何でもないが雨が降ると泥がひどく

— そこはコザですか。

ローレンス いや、コザの郊外で、コザからそんなに遠くない所。木一本ないひらけた部落で、のちにコザ市になっていきました。

— それから石川へ行ったんでしょう。コザにはどのくらいいたのですか。

ローレンス 一ヶ月かそこら。あるいはもっと長かったかも知れません。

— ムーレー大佐は何時クリストに代ったのですか。

ローレンス 大佐は侵攻時に任務についていました。田圃に私を置き去りにした海兵大佐が、ムー

レーです。彼のことは忘れられません。彼の判断が正しかったかどうか疑問ですが。(笑) 彼は Fort St. に来ていました。一番前の席に座るんだと言っていました。まさしく我々は一番乗りをしたのです。

— 私の印象では、大佐は沖繩人から好感をもたれたようですが。
ローレンス 人のいゝ。おもしろい人でした。物事を勝手に一人で決めるタイプでなく、一生懸命任務に励んでいました。

実戦部隊と共に上陸したAチームは四月二日嘉間良部落にテントを張り、そこを本部とし難民の牧畜管理にあたったが、第十軍軍政府はムーレー海兵大佐 Charles I. Murray, Colonel, U.S. Marine Corpsによって越来村字安慶田・室川・越来のいずれかの部落に樹立された。たゞ足場が悪くキャンプコザは移動した。大田(一九九〇年九月 二四九頁)には「第十軍軍政官と島興司令部は上陸後八日から十二日にかけて共同の軍政本部を読谷北方約一マイルの地点に設置した」とある。

ハンナ博士もLSV-6から北方二マイルの地点に四月十日頃移った。そこで約六週間キャンプ生活をし、それから北へ二、三マイルの石川へ移ったといっている。軍政府が石川市東恩納に移ったのは六月二日から三日にかけてである。

註

1. 一九九三年五月二十日聴取
2. Language officer としてクリスト准将の近くにあったハンナ大尉はクリストに関し詳しい人物評を残しているが、沖繩の人達に対する考えはクリスト自身の発言が余すところなく語っている。大田昌秀(一九九〇年九月)二五二頁
3. コザについては比嘉春潮全集、第三巻三百八十五頁をよる。

四 米軍の沖繩人観と沖繩住民の米軍観

沖繩占領二十七年のありようは、沖繩が背負った特異な歴史とアメリカのネガティブな沖繩人観が投影されていた。政治はもとより、文教政策にもそれが読みとれる。実際に施策に携った軍政要員たちの、いわゆる沖繩人観はどのようにして形成されたのであろうか。

Lichiu Islands: background information and sovereignty question 7/12/1943 (スタンフォード大学助教授 John. W. Masland 起草) には次の記述がみられる。

Inhabitants of Lichiu Islands have complex racial backgrounds and are somewhat different from the Japanese. The original population was probably of hairy race such as the Ainu or Kumaso. A Malay stock similar to that of the natives of Formosa came from the south and mongoloid stock came from the north by way of Korea.

In recent centuries settlers have also come from China and Japan. The original strain is still noticeable among the rural people, whereas Chinese influence is mixed in the cities. Most of the higher officials and schoolteachers are of Japanese stock. The prevailing language is Luchuan, which differs from Japanese about as Portuguese does from Spanish. Standard Japanese is taught in schools and is understood and spoken by many of the people in cities and towns¹⁴.

トスミンズの沖繩人観は「民政ノソノト」に引継がれ、作戦論に關係づけられてくる。

14. PEOPLE

14.1. Racial Characteristics Racial Status

Despite the close ethnic relationship between Japanese and Ryuku islands, and their linguistic kinship, the people of the archipelago are not regarded by the Japanese as their racial equals. They are looked down upon, as it were, as poor cousins from the country, with peculiar rustic ways of their own, and are consequently discriminated against in various ways.

The islanders, on the other hand, have no sense of inferiority but rather take pride in their own traditions and in their longstanding cultural ties with China. Inherent in the

relations between the Ryuku people and Japanese, therefore, are potential seeds of dissention out of which political capital might be made. It is almost certain that militarism and fanatical patriotism have been but slightly developed, if at all, in the island population¹⁵.

さらに本土住民と沖繩住民の間に介在する負の関係を齒に衣着せず記述しているのが「琉球列島の沖繩人」である。大田昌秀の解説を引用する。「沖繩社会の特質を解明しています。その中で筆者たちは、とくに沖繩人が日本人に対して反発する傾向があるのをとらえ、それを日本軍が内包する負の要因とみて、こうした負の要因を沖繩戦における心理作戦面で、どう活用しうるかといった、戦術論を展開しています。要するに日本本土の人びとと、沖繩の人びとの間に介在する心理的裂け目 (cleavage) をとつとん戦闘で利用することを提案しているのです。」¹⁶ なおこの文書には大和の桎梏から沖繩を解放しようという所謂自由琉球運動の構想が底流にあるという。この思想は文教政策にも反映してくることになる。

このような沖繩住民観は上はマッカーサーから下は星一つの一兵卒に至るまで、強烈な刷り込みとなり、二十七年間の沖繩統治の主旋律をなしていた。彼等はこのような先入観を持って上陸したが実際はどう見たであろう。CICは次のように報告している。

files.04. Civil Information
Civilian Attitude

After two weeks observation, it is agreed that civilian population is humble, docile, cooperative, unambitious and amenable.*

沖繩人は日本人ではないという刷り込みと、上陸しても間もなく上のような沖繩住民観がつくられたから、戦闘的日本人に敵しく、オキナワンを優しく扱ったのであろう。戦前、名古屋の高等学校で英語の教師をしていたワトキンス博士はさすがに先人観にとらわれない見方をしている。博士は手紙に次のように書いている。

18 December 1946

Dear Professor Tozzer

I regret that I have nothing to send you that bears cleavage between the Okinawans and the Japanese. We found very little evidence that such a cleavage was important to Okinawans. On the part of the Okinawans there seemed to be little antipathy for the Japanese. So for the Japanese there were too few (other than the members of the armed forces) to allow for such an observation.

ワトキンス博士はG.カー著「琉球の歴史」USCAR版の序文で沖繩とその住民をテキサス州とそ

の住民にたとえているのがそれは適切な喩である。博士は「しかし、双方の間に人種的なつながりや言語、教育、政治、行政……などは共通であると考えられてきた。また実際永久にそうであると思われる」と結んでいる。

・ハンナ大尉の沖繩住民観

ハンナ大尉は古い資料に基く、或いは沖繩人に対しバイアスを持った記述をしていると批判しながらも、丁寧に「民政ハンドブック」を読んでおり、その沖繩住民観から逃れられなかった。上陸後間もない四月五日頃ハンナ大尉ら数名が慶良間列島視察を命じられた。その日ハンナ大尉は始めて沖繩を体験した。

「……私は野良で働いている女達を観察した。年寄は手と腕に入墨を（台湾の影響が一目瞭然）していた。女達が掘っているのはサツマイモだった。サツマイモは沖繩人の主食であるが、日本ではまず好まれない食べ物である。中国人にとってはごくありふれた食べ物で、中国人は好んでたべる。

私は大きなお碗をひっくり返した形の墓を見た。それは中国南部からの直輸入である。次に住民が話すのを聴き、動作や反応に注意したが彼らの立ち振舞いは、日本人と異っていて、中国、朝鮮、東南アジアの影響を混ぜ合わせたもの、ように思われた。その日私は驚くべき結論に達した。沖繩人はどうみたって、今度の戦争に加担していない。沖繩人はこの戦争に対し、信念も関心を持っていない。

この戦争は沖繩人の戦争でなく、何も知らない内に、巻き添えを喰ったに過ぎない。彼らは犠牲者で

ある。沖縄戦は日本とアメリカの戦争であり、沖縄人とアメリカ人の戦争ではないということとは自明である。

沖縄人は日本人ではない、軍国主義の犠牲になった少数民族。そしてそれを救うのは外ならぬアメリカ人であるという使命感、あるいは白人の責務は宣教師の子に生まれたハンナにとってまさに召命であった。

しかし末端の軍政要員の中には次のような者もいた。私は、空腹で家を焼かれたことを手真似で訴えては相手の同情をかい、菓子をねだる物乞いに変じていた。実際着のみのまゝ焼け出されたので、ポロをまとった新しい「原住民」になったのである。彼らは子供たちを集めては頭の上からばらばらと菓子を投げて、その奪い合いをながめては白い歯を見せて喜んだ。…子供に一つの教育(宣撫)をして行った。私たちに、「日本人か沖縄人か」とたずね、答えがすべて「沖縄人」とはね返ってくるまで根気よる教えたものであった。

軍政府は第十軍司令部指令第一号(一九四五年五月三日付)を発し、住民に対する態度に関し注意を喚起している。一、軍政要員は沖縄の住民の尊敬を得るために、その言動に注意しなければならぬがいたずらに現地住民と馴れ親しんではならない。(no fraternization, no familiarity) かし上の例が語るように、尊敬を得ることは容易ではなかった。一般の将兵は沖縄住民を“gooks”と侮蔑語で呼んでいた。このような将兵の態度に軍首脳は頭を痛めていた。一九四五年十二月二十一日(金)

の諮詢会の席上ワトキンス少佐は沖縄側の意見を聴取している。「沖縄ノ名称ハマチマチデ『オキナワン』『島人(トウジン)』『グークス』『シビリアン』ト呼ンテキルガ沖縄ト琉球ト熟レガヨイカ」と尋ねたのに対して、松岡政保は「オキナワン(人)、オキナワ(島)トイッタ方ガヨイ」と答えている。軍政府首脳は住民との関係に気を配り、その後、命令を出し、グークスという呼称を禁止した。日本帝国陸軍が支那大陸の占領地域で「チャンコロ」という侮蔑語の使用を禁止したかどうか寡聞にして知らない。

・沖縄住民の対米軍観

米軍は「琉球列島の沖縄」のいうことを忠実に守り、上陸第一歩から心理的裂け目を意識し、日本軍の暴虐にくらべ、米軍は親切であるという印象を持たせる戦術を積極的にとったという。それが戦術なのか、あるいはヒューマニズムに根ざすものなのか分からないが、米軍の行為は日本軍のそれと雲泥の差である。

兼城賢松の証言がある。「日本軍から受けた被害は人々に取り除きにくい大きなしこりを残してしまった。味方である日本兵に安全な壕を追われたり、食糧を奪われたり、銃殺された人があまりにも多かった。したがってアメリカ軍が上陸し、アメリカ軍の支配を受けようになると、彼らを歓迎こそしなかったが内心ホッとした人が多かったのも無理はない。アメリカ軍は最初「解放軍」と呼ばれていた。だがそう呼び始めたのかわからないがアメリカ軍は「解放軍」と呼ばれるにふさわしい行動

をどろろとしていたように思われる。たとえばある身寄りのない老人を世話しているアメリカ兵の姿を見たとき、私は「鬼畜米英」と恐れられていたにしては、どうも様子がおかしいと思わずにはいられなかった。老人が病気でくそまみれになっていたため、あえて近づこうとする人はひとりもいなかったのにアメリカ兵はそんなことを少しも苦にするようすもなく、口笛を吹きながら老人の身体をきれいに洗ってやり、髪を刈ってやっていた。また親が死んだのか捨てられた赤ん坊が道端で泣いていると、すぐ連れてきてミルクを飲ませ、おしめを替えてやっていた。

このようなアメリカ兵を沖縄住民は命の恩人、日本帝国主義からの解放者として迎え、親米委員会をつくり「TO COOPERATE WITH AMERICA IS PATRIOTISM」『親米即愛国者なり』と日英両語でポスターを書き人々に呼びかけた。しかしこのような対米軍観も土地収容令の前に完膚なく打ち破られることになる。

註

1. Noters Papers国会図書館蔵
2. Civil Affairs Handbook of Ryuku (Loo Choo) Islands 四三頁 琉球大学蔵
3. 大田昌秀(一九九〇年九月) 二〇六頁 東京大学アメリカ研究資料センター蔵
4. Watkins Papers琉球大学蔵
5. 一九一一年生れ。ミシガン大学で英文学博士号取得。四六年国務省に入る。沖縄の文化・教育の復興にきす。

6. W. A. Hanna(1991. 8. 1) マッカーサー、キャラウエイ、アングーらも沖縄人は日本人ではないと公言している。
7. 大田昌秀(一九九〇年九月) 二八三―二八五頁 久米島、上江州智質の記録
8. 兼城賢松『沖縄教師の祈りととけ』講談社(昭和四十八年四月二十八日) 一〇二―一〇三頁

五 アメリカ世の学校と教育再開指令

空と海からの激しい攻撃のあと、米軍は三月二十六日朝、慶良間列島座間味島に上陸し、米国海軍政府布告第一号U. S. Navy Military Government Proclamation No. 1を布告「日本帝國政府ノ總テノ行政權ノ行使ヲ停止」し「米國軍ニ對シ敵對行動又ハ何事ヲ問ハズ日本軍ニ有利ナル援助ヲ為スヲ禁ズル」とともに「住民ノ風習並ニ財産權ヲ尊重スル」旨宣言した。

同島では米軍の上陸を前に村長はじめ多数の村民がむごたらしい集団自決を行った。また渡嘉敷島では日本軍による集団自決の強要により村民が自らの命を絶った。二つの事件は沖縄戦における住民の運命を暗示していた。

米軍の本島攻撃は四月一日とされ、たまたまイースターサンディにあたっていた。一万六千余の将兵は殆ど抵抗もなく、中部西海岸に上陸した。迷彩色に包まれた汗ばんだ身体に潮風は快かった。あまりのあっけなさに新兵はこれはピクニックだとはしゃいだ。沖縄守備第三十二軍が首里地区に主力防衛陣地を築き、彼らを待ち受け、血みどろの死闘になるとは、誰ひとり予想だにできなかった。

彼らは同日北（読谷）、中（嘉手納）飛行場を奪取し、翌二日には北谷、越来村を占領、同地域の住民を保護下に入れた。翌日主力部隊は中南部へ、残りは北部山間地に進撃を開始した。一方住民の保護管理のため、軍政班は美里村字石川部落に難民收容所を設置し、屋我次郎をメーヤーに任命した。石川收容所には戦火を追われた難民が北谷、読谷さらに中南部から続々と送り込まれ、一ヶ月足らずのうちに人口は戦前の二十倍、三十万を超える程ふくれあがった。難民の多くは老人、女、子供たちだった。子供は收容所の柵を抜け出し、ギブミーギブミーを連発し米兵にたかり、疾走するトラックから投げられる食べ物や煙草に群らがあった。

彼らは作戦遂行の邪魔であり一ヶ所に集める必要があった。そこで考えられたのが学校であった。その経緯をハンナ博士は次のように述べている。

ある朝、例によって愚にもつかないスタッフミーティングのあと、クリストがジッと私を見つめていった。「道いっばいに拡がって、車にひき殺されそうになっているあの子供の群をどうにかできないか。喚いたり、吠えたりする以外に、何の能もないあの連中をほったらかしにしていたら、いまに騒ぎを起こし手がつけれなくなるぞ。」私はいつにない真剣な口調に驚いた。「教育をやれ。あの連中に教えることがあれば何でもかまわない。貴官の思いどおりにやってよい。」「えっ、自分がありませんか」「教育将校をやりましたまえ、荷が重すぎないなら」私は突然のことで、しばし言葉を失った。しかし考えてみると、これまで言語将校として、実のあることは何もしてこなかった。何かやり

がいのあるものを求めていたが、教育はまさに探し求めていたものである、しかし経験は無に等しい。「閣下は何でもいゝからやれといわれますが、あるのは難民キャンプだけです。校舎、机、椅子、教科書、学籍簿、校長、予算、時間割表などなど何ひとつありません。」とハンナが反論してもクリストの敵ではなかった。「まあまあ、細いことを並べたてるな大尉。とにかく始めるんだ。話はその次だ。何でも手に入るものがあればそれでよい。まず読み、書き、算数をやらせるのだ。」

ハンナ大尉は三十四歳。自分のような若造が果して大丈夫か躊躇したが、自分に出来ることだけでもやろうと決心し、クリスト副長官の命令に従った。ハンナ大尉が教育将校を引き受けたのは四月中旬ごろである。Technical Bulletinは軍政将校の手許に届いていたのが、ゆっくり眼を通すほど余裕がなかった。ハンナ博士は言う。「まったく哀れな姿だった。食料はないし、家もない。米軍は家屋など片端から破壊したが、ひどいことをしたものだ。こんなことは予想もしていなかった。だから彼らをなんとか生かしておくにはどのようにしたらよいかといったことで手が一杯だった。結局は自分の判断で場当りの事を処理せざるを得なかった。ハンナ大尉は言語将校としてスコフィールドで養成した件の日系兵を指揮し、情報を収集し、クリスト副長官に報告していた。情報収集の任務はCICであり、戦闘中にあつては教育の問題は二の次、三の次だった。

ともかくハンナ大尉は実行に移した。学校再開の準備にあたったのは石川收容地区司令官アレン海軍大尉であった。大尉はまず校長に据えるべき人物を探すことから始めた。たまたま難民の中に読谷

村出身の山内繁茂がいた。山内は四月二十五日家族ぐるみ保護されたときCICの難民登録には正直に「教師」と申告した。数日後アレン大尉が二世兵コタニを伴って山内のテントを訪ねて来た。子供たちがあのようなでは作戦に支障をきたすので元教師だった山内になんとかして欲しいというのであった。山内は総てを委せてくれるならばと条件つきで大尉の申出を受け入れた。アレン大尉は軍政将校の多くがそうであるように、職業軍人ではなく、寛容な態度で山内を助けた。私は彼から何一つ禁止命令を受けることはなかったと、山内は語っている。当時牧港・前田の断層線を挟んで日米両軍の間では一進一退の死闘が繰り返されていた。山内が学校再開準備を始めたのは五月頭初であった。南の方には遠雷のような砲音が聞こえ、石川岳から伊波城址にかけての丘陵地帯には、日本兵が出没して、時々はじけるような機銃の音がする。北部を制圧した部隊が中部戦線に投入されるため、大砲、戦車、兵を満載したトラックが南方へ疾駆する。入れ代りに難民や負傷兵が野戦病院に続々と運びこまれる。カンパンに入れられた男たちが米軍の塹壕掘り、弾薬運び、負傷兵の世話や死体収容に連れ出されてゆく。金武灣をうめる米艦に日の丸も鮮かな特攻機がつっ込む。日米両軍の勝敗の目途もつかず、収容所内の住民は日本兵の斬り込みにおびえていた。敵と味方に挟まれ、山内は利敵行為として、日本軍の報復を覚悟し、敵の要請を受け入れた。

彼には国民学校の子供が二人いた。これも山内の覚悟を決める力になったらしい。今日米両軍は戦っている。その勝負は分からない。それがどうあれ、自分達の子供は自分達で守るしかないのではないかと行って山内は集団非行化してゆく子供たちを集めることから始めた。開園初日の生徒数は山内本人も当時の教員も、しかと把握できなかったようで百名ぐらいとも四百名ぐらいともいわれる。

学園は現在の石川市役所の向い二百八十四〜二百八十六番地にあった。山内は身を守るためアレン大尉から貰ったヘルメットをかぶり作業班を指揮し、学校敷地の整備にあたった。あれはアメリカの学校を作っている。あれはアメリカ側だと白い眼で見られ、とかく難しい時期であった。

子供の面倒をみるのは、その日に割当てられた作業班であった。学業途中で戦争にかり出された女学生が、肉体労働に向かないから子守ぐらいならんといつて教員になり、そのまゝベテラン教育になった例もある。

やがて山内は本職の教師を探し始めるが、これが難渋を極めた。なにかと住民をスパイ扱いし、斬殺していた日本軍の報復を恐れ、アメリカ学校に手を借す教師はいなかった。結局山内は元教員の夫人と中学生だった甥だけで始めた。

米兵を恐れて天井裏に隠れていた女教師を、二世兵の口から生命を保証するからといって説得した。日本兵に身内を斬殺され、脅えていたある教員はあの子供の家族ぐるみ命を懸けた山内の言葉に私はもはや固辞できなかったと曾根に述懐している。「子供たちを事故から守ろう」「不良化を防ごう」という開園趣旨が班長を通じて住民に伝えられた。皇軍が奮戦している時、敵の学校に子供をやるかと思をむく日本国民もいた。しかしアメリカ軍の命令だからではない。たといどんな状況でも自分た

ちの子供を守るのだという山内の信念が人々に浸透していった。

アレン大尉はまず幼児を集めると云ったが管理が難しいので四年生以下の児童を集めた。年齢別にクラス分けをし、木陰を追って場所を移動しながら、知っているかぎりの歌をうたわせ、小さい子には米兵にきこえよがしに福木の葉でワンスリースリーをいわせ、時には海岸に出て砂浜で字の練習をさせた。

アレン大尉はよく学園に出入していたが、山内の硬骨さと良識を信頼していた。カンパンの作業員に焼け残った喜藝國民學校から国定教科書を探して貰い、それを使ったが大尉は山内との約束を守り、何一つ文句を言わなかった。

五月十三日より五年生以上の生徒も週二回(水・日)午後出校させた。食糧事情が悪く交代で毎日二、三百名の生徒を藩堀に連れ出した。難民の増加に伴い生徒数もふえ、六月中旬学園は現在の城前小学校敷地に移った。

アメリカ軍は四六時中監視し、とくに全校生徒集會に神経をとがらせていた。コタニ二世とMPがクラスの周りをふらつき、きく耳を立て、耳打ちしたりするので教員がおじけつくと山内はいつも同じ事を繰り返して言った。「米軍に対しても日本軍に対しても、私たち家族が命をかけて責任をとる。心配するな。」

山内は天皇制廃止など夢想だにしなかった。歌の意味が、暗くながちな心に向くと思ひ、明治天皇御製「浅みどり澄みわたりたる大空の広さを己が心ともがな」を毎朝生徒に朗誦させた。始めのうちは祈りの文句ぐらいにでも思っていた二世兵がどこかで色々きいてきて、あれは困るからというので止めたが一ヶ月ぐらひは続けた。

六月中旬頃から漸次教員の陣容も整ってきて、体育主任が全校生徒の集合解散のさい大声で号令を掛けていたらMPがやってきて、団体訓練は困る。なにもいちいち号令を掛けなくとも各自自然にできるだらうという。どうやらMPが山の上から双眼鏡で見張っていたらしい。

沖繩戦の目途もつき、テント校舎が立ち始め、机椅子を作るため山内はガリ版刷のチラシを配り、父兄に協力を呼びかけた。「今将兵は前線で戦っている。吾々銃後にある者は、その人達の子弟と自分の子弟の為に精一杯つくすのが当り前ではないか」という要旨だった。十月二十二日石川学園は本校を城前校、新設校を宮森校、中等部を石川高等学校とし、それぞれ独立させた。新設校は伊波城の麓にあるから城前校、石川宮を含むから宮森校という山内案が採られた。

石川学園が期待以上の成果をあげているので、ハンナ大尉は学校再開に踏みきり各収容地区指令官・隊長宛次の指令を発した。

社会的社会事業計画 地区教育及び娯楽 軍政府指令第十六号一九四五年五月十五日付

一 地区の教育や娯楽に関する次の計画は実行可能であれば地区担当指揮官によって実施されることが望ましい。

a. 組織化

地区の教育や娯楽の計画は收容所や居住地区により調整された計画を含むよう展開されることが望ましい。彼は班長や他の地区指導者達と相談し、援助を得て娯楽活動に着手し、監督することになる。三十人の子供たちに対し、民間人助手一名が当てられるとよい。

b. 組織

その計画は小学生年齢の子供たちに施されよう。軍政官の助言と援助を得て指導者と班長はふさわしい場所を準備し、教師を選んで任命し、簡単な設備をそろえ、次のような活動を与えることが望ましい。

- (1) 遊戯及び身体的娯楽
- (2) 歌、手芸及び関連する活動
- (3) 簡単な程度で最小限の教材を使用し生徒に読み書き算数を教えること。

二 この計画を発展させるための技術的援助は社会事業部長や軍政本部より与えられるであろう。上の指令はハンナ大尉の起案によるものであるが可成りの不安と不信があった。「教育制度は当然日本の国家主義を宣伝するための強力な御用機関になっていたと我々は疑った。かつ授業内容も極めて国家主義の濃いものであることは分っていた。教員は国家主義に教化され、狂信的に国家主義のお先棒をかついでいた。このような観点に鑑み、軍政府はいかなる形であれ、学校再開を躊躇したので

ある。何故なら我々の教育計画が反対派の煽動家によって容易に利用されかねないと考えたからである。教員がどちらを向いているか調べる為に種々規則をつくったにせよ、言葉の壁に阻れ、それは不可能であった。上述のように開校前は、何か反米的攻撃にあうのではないかと危惧していたが、いざ開校してみると沖繩人は破壊的活動を企む気配など微塵もなかったとハンナ博士は述懐している。軍指令第十六号が発せられて間もなく宜野座地区にも学校が設立された。宜野座初等学校新屋敷文太郎の記録をかりることにする。

六月六日CIC本部に新屋敷三名が呼び出され、学校設立に関する事情聴取がなされた。新屋敷は沖繩戦中であり、山から下された避難民は自失の態で生命の恐怖にさらされ、童児の收容は至難である。さらに米国式の教育に危惧の念もあると断ったがCIC将校に米国式を押しつけるつもりはない。沖繩式で構わない。それよりもたゞ子供達を一ヶ所に集めて欲しい。父母兄弟が作業に出るのに手足總になって困ると云われ結局引き受けた。三名は憲兵隊長からスクールティーチャーの許可証を受領、学校設立の準備にとりかゝった。

六月十六日午前九時開校式。生徒は男二百十名女二百四十名計四百五十名。来賓として米軍将校ニコルセン少佐以下三名。父母五百名。子供たちの顔は心なしか晴ればれ。

父母は涙ぐんでいる。教員男三、女三、計六名でスタートした。

髪は伸び放題、垢だらけ、衣服は綻び、三ヶ月前の朗かな子供たちとは思われない。裸足に青白い

顔、川や海で米軍から支給された石鹼で垢おとし。教師も生徒も日向で風退治、砂糖キビを噛んで空腹を癒す。野山に生徒を連れ出し語らう。戦争を忘れさせようとする高射砲の音で生徒を避難させる。世間の口がうるさく教師が道を通るとアメリカ学校と嫌がらせを言われる。夜は日本軍が教師を襲うとデマが飛んだ。新屋敷は子供を救って殺されるなら本望だと決意していた。学校に行きたいが着る物が無いというので、軍に日参、布地を貰い、午前中は授業、午後は日暮まで針仕事にはげむ女教師。避難小屋建設にかり出され、山へ萱刈りに行き、女教師は黒人兵を警戒しながら監督にあたった。

一九四五年十一月二十一日宜野座初等学校職員一同は安里源秀市長より表彰賞が贈られた。

註

1. W. A. Hanna 1991. 8. 1
2. 因みにローレンス師は Technical Bulletin を使った覚えがなく、いちいち上の指図で任務にあたったといっている。
3. 宮城悦二郎「沖縄統治の顔」沖縄タイムス一九八五年一月六日付
4. 以下曾根信一「石川学園の記録」「琉球文化」第五号（昭和四十九年五月琉球文化社）に依る。同論文は氏が山内はじめ元教員・生徒に面接、実施踏査に基いたもの。
5. 第八軍 C・I・E 要員も横浜市で同じ注意をしている。たゞ違うのは沖縄では日本のものを排除しようとする。

- ついでにこの点も。 Prior to that time (5月15日) the whole Okinawa educational system was under investigation for possible Japanese influence. "A BRIEF HISTORY OF MILITARY GOVERNMENT ON OKINAWA" 『フトキンス文書』第2巻法政大学沖縄文化研究所蔵
6. 山内が曾根氏に打ち明けた話によれば、あの当時の気持としては宮城（皇居）の二文字を二つの校名に温存したつもりだ」といふ。因み山内はクリスチャンである。一九九三年四月三十日電話聴取
 7. 川井勇「戦後沖縄教育の一考察」琉球大学教育学部紀要第二十六号、三〇五頁
 8. W. A. Hanna "Social Rehabilitation" (Folder-X-1-2-3 Hanna/Walkins) 五頁
 9. W. A. Hanna 1991. 8. 1
 10. 琉球政府文教局編『琉球史料第三集』（以下史料Ⅲ）（一九五八年）五〇一―五〇三頁

六 大和世の児童・生徒

山内が石川学園の開設に踏み切った頃、朝日新聞（五月二日付）は、「沖縄週邊の敵艦猛攻・荒鷲・潜艦連続出勤・空母廿一隻撃沈（大本営発表）」と報じ一面を飾っている。本土決戦が呼ばれ、大人は竹槍の練習、国民学校高等科は女生徒とまで木刀を作らされ、菓人形に立ち向った。低学年生は「いざ来いニミッツ・マッカーサー出てくりや、地獄へ逆落とし」と高唱していた。

石川学園の生徒は皇民化教育から解放されて「討ちてし止まむ」「欲しがりません勝つまでは」といった戦時標語が急速に風化していった。

同じ頃、南部では姫百合部隊に犠牲者が出始めた。(四月二十六日、五月四日)。島の北半分がアメリカ世、南半分が大和世。米軍は「鬼畜米英」であり、「討ちてしまむ」存在であった。戦闘員、非戦闘員の区別はなかった。「一人十殺一戦車」「一億皆戦士」であった。

玉那覇春子(当時七歳、具志頭村生れ)

どこへ行っても壕の中には兵隊がいっぱいで銃剣を持った兵隊が入口に立って避難民が来ると追っばらんです。母が言うには自分達はこれまで軍に協力してきて、どうしようもなく避難してきているんだからせめて子どもたちでも入れて下さいとお願ひするんですが、子供は余計邪魔だ。泣き声を上げたら締め殺されるぞとおどかされて目の仇にされ追ひ出されるんです。

……屋敷じゅう死体がゴロゴロして生き残った人もみな重傷ですから誰も助けてくれないんです。母は水が飲みたい、水が飲みたいといっていました。どんどん出血しているから喉がかわいてくる……

古堅実吉(当時十五歳、立法院議員・人民党書記)

童顔がぬけきらぬ少年までも帝国軍人として死んでいった。そして上級生だけでは間に合わなくなったでしょう。やがて五月下旬になると小銃の打ち方も分からない一年生の中から斬込隊が編成され、首里城東方の弁ヶ岳に送り出されました。それが死を意味することは余りにも明らかでした。

……野田校長はすでに百数十名に達していた師範隊の戦死者名簿を手しながら……次のように語りました。「諸君はどんなことがあっても死んではいけない。生き残って今後の沖繩を支えていく人びとにならなければならぬ。」この一言は野田校長の遺言となった。六月初旬喜舎場尋常高等小学校卒のタケジローヒガ(比嘉武二郎)軍曹は訊問している難民の中に恩師中村春勝先生の顔を見出した。また日本軍の軍服を着たかつての同級生を尋問した。ヒガは育ての国に銃を向けることなくうちなあ口と英語で任務を果たしたことを誇りにしている。

大城実雄(当時十八歳)

五月初め、第五砲兵司令部に配属された私たち一中鉄血動皇隊は……。 「阿母よ阿母よ」と泣きさげんでいる一団の背負っている砲身に菊の紋章があって、明治二十九年と書いてあります。明治二十九年の武器をいまも使っているのです。この異様な一団は少年たちでした。無理にひっぱり出されて、協力させられていたのか、背後から兵隊が鞭でひっぱたいて「馬鹿野郎、キサマ、それでも日本人か」……彼の傷は深く肉をえぐりとられ尻骨が突き出ていました。彼の傷には小指ほどのウジがはいまわっていました。「お母さんにあいたい」と彼は言いました。……私は手榴弾を持たせ自決をすゝめました。彼は観念した様子でした。水を与えて私は立ち去りました。

バックナー中将の降伏勧告を黙殺。牛島満中将は六月十九日「爾今、各部隊各局地ニオケル生存者中ノ上級者之ヲ指揮シ、最後マデ敢闘シ、悠久ノ大義ニ生クベシ」の最後命令を発し、二十三日摩文仁で自決。一草一木をも戦力化し徹底抗戦せよという命令は学徒隊、特志看護婦、護郷隊を多数玉砕におい込んだ。六月二十三日米第十軍は沖繩での日本軍の組織的抵抗の終結を宣言、国旗掲揚式を行った。

垣花秀子

大和撫子が捕虜に？とんでもない。死のう！私達はとっさに死を決心した。いつの間にか十二名が車座になり、三個の手榴弾が適当に配られた。ひと思いに死ぬ。これが最後の願であった。まえから三個の手榴弾で、全員即死できる、できないで、結論はまだはっきり出ていなかった。もう自決の時が来た。

福地キヨ子が今にもセンを抜こうと身構えた。下級生の身体がふるえているのを見るとセンを抜くのが躊躇された。その時、先生のきびしい眼光が射るように私たちにさゝった。「今死ぬんでないぞ！福地セン抜くな！」と怒鳴られた。先生がおっしゃる「今死ぬのは待て、死のうと思えば死ぬ機会などいくらでもある。幸いこれから行く先きぎきは断崖の上だ。もしものことがあったら私が目くばせをするその時に死にとび込んで死ぬばよい。……アダンの茂みから出て、針山

のような岩の上を歩いていると捕虜という言葉が私の頭の中をかきむしった。あゝいやだ。死にたい。やはり死のう。……神国日本に生まれて捕虜になる！こんなことがあってたまるものか。死に倍する恥辱だ。

大田昌秀

千早隊の大田らは首里を脱出、収容所の住民の間に潜伏しつゝ敵の占領政策を撓するという地下工作の任務を果すべく死線を彷徨していた。……何度手榴弾に手をやったことだろうか。敵と身近に対決したときより死は身近にあった。死はとっておきの最後の慰安のような気がしてならない。口もきかず身動きもしない死体の群と一緒にいると、死んだ人びとが羨ましく思われてならなかった。

大田が投降したのは太平洋戦争敗北後一ヶ月も経った九月二十三日である。沖繩の人にとって六月二十三日も八月十五日も何の意味もない。各人が米軍に捕えられたり、保護された、その日が終戦で、その日から戦後が始まった。足腰の立つ者は老幼婦女子に至るまで天皇の赤子として祖国防衛に協力させられ散華した。それは明治以来の皇民化教育の成果であり、垣花秀子に代表されるように「生キテ虜囚ノハズカシメヲ受ケズ」という軍国主義教育が頂点に達した瞬間である。

八十二日間にわたける軍民一体の死闘は青壮年の命を多数奪い、戦後の沖縄復興に計り知れない被害をもたらした。

註

1. 儀部景後編『沖縄戦 県民の証言』私の戦争体験記 日本青年出版社（一九七二年四月二十八日）
2. 一九九四年八月二七日聴取（ホノルル）
3. 仲宗根政善『沖縄の悲劇』おりしん書房（一九七四年六月十五日） 二九四—二九五頁
4. 大田昌秀『沖縄のころ』岩波書店（一九七二年八月二十一日） 二百五頁 日本兵が民間人になりすまして収容所に潜入していた。これに対し米軍司令官は次のようなビラを配って注意を喚起した。日本の軍人が市民に變装して市民の様に見せ掛け市民収容所に潜入して居る実例がある。昭和二十年四月二十七日、事実ヒガは潜入した将校を見つけ出したと筆者に語った。
5. 沖縄県史料Ⅰ 六百三頁「終戦直後の沖縄の人口」或は軍政府による調査（ゴードン・ワーナー（一九七二年四十頁）の年齢別、男女別の数字は沖縄戦の何たるかを語っている。

七 戦後初の教育者会議

北部最大の収容地区田井等には志喜屋孝信はじめ元教員が何人か収容されていた。七月の或る日田井等公園に志喜屋孝信、又吉康和、山田有幹、有功、新城徳助、比嘉永元、比嘉善雄、仲宗根源和ら二十名前後が集り教育問題を論じた。

会議を開いた動機を比嘉永元は次のように語っている。子供たちの周辺には危険なことがいくつもあり、道に出るとアメリカ兵が子どもを車のタイヤにくっりつけるそうだと噂され、親たちはふるえあがったもんだ。悪に染まる心配もあった。米兵のところへ行つて戦果をあげてこいと大人がそのおcasのだから始末におえない。そこで教育者が田井等周辺に集った機会に対策を考えてみようということになった。

教育会議の議長をつとめた比嘉永元（俱会議員、元国頭郡教育部長）は日本が負ける筈がないと確信していたのに、このような結果になったと挨拶を述べる途中、万感胸に迫つてむせび泣いてしまった。

会議の結果 次の結論を確認し散開した。

- 一 教育の基礎は、博愛・人道・労働尊重等、人類共通の徳目をあげ子供たちの精神的支柱とする。
- 二 軍歌を廃して、優美な情操を育てる唱歌を教える。

三 アメリカ人と接触が絶対に必要になった今日、出来るかぎり彼等の風俗、習慣を理解するように努める。

この会議は私的な会議であったが瀬長亀次郎助役宅での第二回会議から公的な性格をもつようになった。この決議はやがて教育基本条例と教科書編修方針の中にとり込まれることになる。その意味で田井等公園会議は戦後の沖縄教育史上特筆されるべき会議である。

註

1. 『沖縄の証言』上 沖縄タイムス社（一九七一年五月十日） 九七頁 仲宗根源和『沖縄から琉球へ』 日刊沖縄社（一九七三年五月一日） 七〇―七二頁

八 教科書編修に向けて

戦火が消えて七月から八月にかけ各収容地区にprimary school（小学校）やhigh school（ハイスクール）が開校されるようになった。しかし校舎は勿論教科書一冊あるわけがなく教員は難渋していた。生徒に教科書をといて願いは教員は元よりハンナ大尉の頭から離れなかった。大尉が教科書編修に着手しようとする矢先き、思わぬ幸運が転り込んできた。軍政本部が東恩納から二マイルばかり下に移り、数軒の家屋が空いたのである。ハンナ大尉は早速部下のジム・フルカワ伍長とともにこの空

屋を文化センターに改造した。一軒を教科書編修所Okinawa Textbook Compilation Officeにあて、他の一軒を画家達のアトリエに、また沖縄舞踊稽古場に、さらにもう一軒を博物館にあてた。ハンナ大尉はこれらをHanna Complexと呼び、画家の山田真山に管理させ、時には自分も寝泊りした。

軍政の諮問機関設置の準備にあたり軍政府は戦前の指導者の名を挙げさせ名簿を作成した。その中に県立第二中學校長山城篤男の名があった。山城は六月二十日女婿の安里延（県教学課長）とともに南部真壁で捕虜になった。同月二十四野高に送られ、即日校長を命じられた。ハンナ大尉は山城を訪ね、沖縄の政情や日本に対する考え方など、あれこれ質問した。訊問されているような雰囲気だったという。

山城が七月末日古知屋に移されると再びハンナ大尉が山城を訪ねた。太陽がキラキラ照りつける暑い日ハエがうるさく飛び交う、すし詰のテントの中で山城は束ねたワラの上に腰をおろし、何やら本を読んでいた。白哲の青年ハンナは温厚な山城にハイスクール時代の恩師の姿をみた。何よりも流暢なキングズイングリッシュに驚いた。ハンナ大尉は教科書を編修したいので手を貸してもらいたいと要請、山城を石川に連れてきた。八月十三日のことである。山城の推薦でコザ収容所の真玉橋朝英、喜久里真秀が、一緒に古知屋に収容されていた安里延、仲宗根政善が、続いて島袋全亮、園花咲也、多和田真淳、比嘉徳太郎が、九月に入り宮城元助（山城先生から来ないかと誘われました）、大田昌秀（原紙キリ補助）、天願俊貞（ローマ字テキスト作り）、護得久朝章（骨董品係）、大城皓也、山元

恵一（挿絵係）などが順次呼び寄せられ。人容も整い一月もしないうちに、編修作業に追いまくられるようになった。収容所は男女別だったので男達は妻子の安否を気遣った。ハンナ大尉はすぐ手を廻し、山城の家族を探し出し、山城の許に連れてきた。このエピソードはハンナの教育に対する熱意を物語るものである。

教科書編修の予備作業は仲宗根が加った九月初め頃から始められた。大尉と山城の間で何度か協議、確認事項がタイプされた。大尉はメモを渡し軍政府の基本方針を示した。

一、日本の教材の禁止

二、国家主義的教材の禁止

三、軍国主義的教材の禁止

二と三は「降伏後における米国の対日方針」（SWINCC-1150/4A）でも、謳われるが、ハンナ大尉は布告第一号十六に依拠した。一「日本の教育の禁止に関し、「絶対にまかりならんと一番厳しいものでした」と仲宗根はいつているが、それは沖繩を分離するという軍部の方針があったからであろう。

これまでの経過を軍政府活動報告書は以下のように記している。

“初期段階”

軍政が始まった最初の一ヶ月は、学校活動の再開は禁られていた。民間人の態度は未だはっきりと

決められていなかったし、全ての日本の教育制度は疑惑を受けやすかった。また建物や人材や再組織の問題は、戦闘状態の下では克服できぬものであった。五月十五日、小学校生徒がクラス編成され、学校活動が限られた範囲で再開され、主に娯楽的計画と関連づけられるよう許可された。その意図は子供たちを一ヶ所に集めておくことであり、彼らを勝手にうろつき廻らせまいよう収容管理のためであった。

“復興”

数ヶ月間、学校活動は、この論拠にもとづいて進められ、次第に建物や運動場を獲得し、使用可能な教材の範囲でごく普通の授業を行っていた。八月中旬には既に始めていた学校の監督、全島規模での教育制度の組織、教材の編修、配分の指揮、学校支給品の調達、またその他の点で、教育計画の進展を図り、調整するため、司令部教育課が設置された。八月の残りの期間に教育課は六人の指導的な沖繩の教育者を選び、彼らと非常時のものにふさわしく、また長期的展望をもつような教育制度について立案し、教科書編修の指示を与え、支給物や謄写版設備を調達し、地方の学校や、その指導者と接触をもった。

その時決定された教育政策は六歳から十二歳までの児童のために、なるべく早く小学校の最初の六学年を元に戻すことであり、可能な範囲で六歳から十四歳までの全児童に小学校八学年を、また前期千人、後期千人の生徒のため、高等学校を用意すべく拡大してゆくことであった。

教授の主要科目は読み方、書き方、算数であった。英語、沖縄の歴史と地理、世界の歴史と地理、衛生、そして礼法は設備があれば必ず教えられなければならない。遊戯、音楽、園芸そして手芸は少くとも一日一時間、その計画を付け加えねばならなかった。日本の修身や国家主義は、軍国主義的傾向をもつあらゆる教材での授業は厳しく禁じられた。教科書はアメリカの思想や政策に対し、望ましくない内容や批判を防ぐため厳しく検閲された。

註

1. W. A. Hanna 1991. 8. 1
2. W. A. Hanna "Okinawa Ten Years Later" (December 23, 1955)
3. 仲宗根政善「占領下の教育裏面史」『沖縄戦後史への証言』(沖縄タイムス社 一九八二年二月)挿絵についてハンナ博士は講演の中で「最初作ったガリ版刷教科書は文字だけで寂しいので、さし絵を入れるため金城安太郎、故山田真山らの画家を集めたといっている。(沖縄タイムス一九九一年八月二日)
4. 川井勇「戦後沖縄教育の一考察」琉球大学教育学部紀要第二十六集(一九八二年)三〇五—三〇六頁 U.S. Naval Government Report of Military Government Activities for Period from 1 April to 1 July 1946. (The Final Report) 1 July, 1946. 沖縄軍政府小史(1946. 10. 28) は上のレポートに依ったと思われるが若干の違いが認められる。

The main subjects of instruction in the reopened schools were reading, writing and arithmetic, with English, Okinawa history and geography, world history, and geography and hygiene being

taught where facilities permitted. Instructions in Japanese "ethics" and all nationalistic or militaristic subjects were strictly forbidden. School texts have been carefully checked to prevent dissemination of information in conflict with democratic principles and prejudicial to American ideas and policies. (ワトキンス文書、法政大学沖縄文化研究所蔵)

九 学校教育を英語で

占領とは他国の領土を現実「自己」の権力の下に置くことであるが、視点を変えれば、或る文化をもった民族が、異なる文化をもった民族を征服することであり、そこには意図的であれ、あるいは抗し難い趨勢として、言語・文化の攝取・融合・同化の力が働く。

かつて静岡大学教授鳥居次好が自分は戦時中シンガポールで日本語教育にたずさわったと語ったことがある。日本は大東亜共栄圏の建設を目指し、またその理念を理解させ、積極的に提携、協力をさせんが為、東南アジアにおいて日本語を公用語としようという国策をとった。これに反し米國務省の対日占領政策では言語にはふれないことにしていた。たゞ英語の時間をふやす方針は明確に打ち出していた。第十軍軍政課も國務省の方針にそっており、Technical Bulletinでも軍指令第十六号でも言語問題には一切ふれていない。

ところで『戦後の沖縄教育史』は言語教育に関し、次のように述べている。「占領当初英語ないし

英語教育の問題は米軍政府にとって重要政策であって、できれば沖繩の教育を英語で行うことを意図していたであろうが、沖繩の教師をはじめ教育関係者はこれに反対したので米軍政府は日本語による教育を認めるように至った。しかし日本語だけの教育課程は許されず、初等学校一年から英語を正課にとり入れることになった。

仲宗根政善の語るハンナ大尉の人間像とこの記述は結びつかなかったがハンナの次の証言に出会って、胸のつかえがおりた。「……必要な用具・物資は軍政府が供給するから、まず読み、書き、算数、それにもしよければ英語もといったが、英語のことはあとで大問題になった。……ある人が英語で教育をしたいと言ってきたからだ。これは問題だと思っただけで、心配にもなった。戦争も終っていないのに国語を変えようと大変なことになる。それでそのことについては何も決定しないことにした。でも英語のテキストは作った。

沖繩の教育が将来どうなるのかだれも知らなかったし、学校のことを英語にするか、日本語にするかといったことも決められない。沖繩人を二級米国人として訓練すべきか、どんな日本人にすべきか。私としては彼らは純粹な日本人と考えていなかった。彼らは沖繩人でもあるし、日本人でもある。しかしどちらの方向へ行っても問題があるし、私としてはどうしているのかわらなかつた。……われわれの方針としてはプロアメリカンすぎてもいけないし、さりとてプロジャパニーズというわけにもいかなかった。

ある人が英語で教育したいといってきたのは八月十五日以前である。この時点では國務省と軍部の間で沖繩の将来について、話し合いが煮つまつておらず、現地の軍政官は困惑するばかりだった。もう少しハンナの言うことをきいてみる。

「私は戦前の教科書を手し、イデオロギーの観点から調べてみたがとくに問題はなかった。英語も正しく完璧だった。そこで急速タイプを打ち教科書をつくり各校に送付した。間もなく好評であるという報告が次々と寄せられた。その中に、教科書を全部英語にしてほしい、英語で教えるようにしてほしいと訴えてきた教員達がいた。この要請に私は暫く考え込んでしまった。沖繩の言葉を英語にかえてしまうのには問題がありすぎ、おいそれと奨められなかった。生徒は学校で日本語を学ばねばならないし、その上いったん家に帰れば、なにかと沖繩語を使うというハンデキャップがあった。」

ハンナ大尉は言語と民族のアイデンティティーについて十分に理解している学者であり、一方沖繩の日本からの分離という軍の方針に忠実たんとする軍政官であり、板挟みになって苦慮した。英語で教育をしたいと要請してきた人に対し、大尉は、今直ぐでなく、今後教育課程を改訂する際に、英語を第一に、沖繩語を第二、第三にしたらどうかと妥協案を考えた。

生徒が一日も早く英語に上達すれば、沖繩をアメリカ領にする、あるいは植民地、またアメリカの一州にしようという提案に対して、より確実な保証となる。我々言語スタッフは言わず語らず、全員一致でこの考えを支持していた。

私自身あれこれ考えを巡らせているうちに、その考えにたどりついた。現在英語の地位は第一位であり、日本語は第二位か、第三位、あるいはもっと下である。沖縄人が英語を話すようになれば、アメリカにおける沖縄株の上昇は火を見るよりも明かだ。しかし問題があった。フィリピン人がスペイン語を英語の下に置いたように日本語を英語の下に置き、英語を沖縄の共通語にしたらその先きどうなるかと思うと不安になった。いろいろ考えた末、この問題は落ち着くところに落ち着き、結局後まわしにすることにした。私は件の人に今はその時ではない。まず教育課程を全面的に改訂することが先決であり、その過程で英語を共通語にしてはどうだろうかと示唆した訳けである。有体に言つと、折角の要請を保留にしまつのは、なんとも惜しかったが、それ以外に答えが見つからなかった。惜しいというのは、沖縄人が英語を話すようになると考えただけでも、沖縄の将来に対する私の気持ちとピッタリしていたからである。しかしながら、この問題は私の審議日程表の中でどんどん後廻しにされてしまった。

ある人とは誰か。志喜屋知事に英語で教育をしたいと言ってきたが「そんなことは出来ない」と断つたと砂川勝信(初代英語センター所長)氏が言われたので、「ある人」を軍関係の人間と思ひ込んでいた。この問題をハンナ博士に確認したら、次のような回答をいただいた。… the suggestion that teaching be done in English was made by one of the Okinawan educators, not by a Military Government officer. Obviously the idea was not accepted”

英語で教育をしたいと言ってきた。或る人”とは仲宗根源和のことであろう。その根拠として三つあげられる。一、一九四五年四月昭和村から田井等收容地区に下山、C・I・Cの補助員となり、毎日C・I・C要員と顔をつき合わせていたが責任者のハンナ大尉に会う機会もあった。二、丸本中尉をして、アーティキュレーターと言わしめる程の能弁であり、戦前共産党員として権力に反抗した。新たな権力者米軍に対しても、その舌鋒は鋭かった。三、一九四六年八月沖縄民主同盟を結成し、独立共和国論をぶちあげたが教育に関しては後述するように、bilingual education を持論としていた。

註

1. 『戦後の沖縄教育史』沖縄県教育委員会(一九七七年)四五頁 なお『沖縄問題二十年』岩波書店(一九六五年五月二十一日)二五頁にも「…英語化、すら試みられようとした」という記述があるが、いまだそれを立証する文献は得られない。
2. 宮城悦二郎『沖縄統治の顔』沖縄タイムス 一九八五年四月七日付
3. W. A. Hanna 1991. 8. 1
4. W. A. Hanna 夫人より私信 一九九三年九月十四日付

十 学校教育の実態と子供たちの生活

各收容地区司令官宛に発せられた軍指令第十八号が実行に移れたのはやはり戦火がおさまってから

である。コザ地区は四月上旬に占領下に入ったのに学校が設立されたのは七月に入ってからである。七月一日 Kozza Primary School No. 1, No. 2, No. 3 の開校式が行われた。英語の下に日本語の式次第。開式之辞、市長挨拶、軍政本部祝辞、閉式之辞。生徒たちは着のみのまゝ、全員はだして校庭に整列。緊張した面持ちで米軍少佐の祝辞に耳を傾けた。式のあと運動会が開かれた。プログラムは英語がかゝれ、ラジオ体操、騎馬戦、唐手、相撲、綱引、歌踊などであった。地区によってはかなり強引に開校させた司令官もいた。

「羽地村呉我の軍政隊長が学校をやれという。教育の経験がないと断ると、米國に協力しないと金網にぶち込むとおどされた。八月三日の開校式に集った生徒が千五百十三人。みんな海岸に連れていって水浴させ、それから鎮守の森で訓辞をした。」軍政隊長の発言。「日本の歴史を教えてはならない。」ほかにないかと質問したらあす君のところでは話そうという。翌朝石鹼をたくさんかかえてきて、「朝起きたらまず、洗面、つぎに体操と音楽をやれ」と時間割を渡されたのには舌をまいた。辞令もなく集められた教師も多く(知念地区)、校長は男子、残りはすべて女教師のみというのが実情だった。(辺土名地区)。

七月下旬司令部の係将校から呼び出され、子供を集め、学校をつくれというのである。……学校は小学校と男子部・女子部さらに幼稚園として校長を二名置き、児童生徒は八年までとし、なんでも二千名近かった。一学級の生徒数は三十名が基準であった。……教科は国語・算数・理科・音楽・英語

で、教育内容は視学校長を中心に経験者の中から、然るべき教師が集って……尤も最初の一週間は水浴びと垢落としてあった。(瀬嵩地区)。

校長が複数名、一学級三十名、八年制、幼稚園の併設はアメリカの教育制度そのものである。敵性言語というところで英語教育は青息吐息であった。(女学校は英語がありませんでした―伊波園子)。教員の過半数を占める教官補の英語力は低かった。したがって、にわか仕立の講習会を開かざるを得なかった。「英語の素養もなくてはならぬようになってきた。児童生徒の学習上、自己研究の必要に迫られたので、全職員を土曜の午後から英語の講座を開講し出席することにした。こうして教育空白の虚脱状態から一步一步前進することができたのである。」(大浦地区)。

名護市立屋我地初等学校では八月十五日付で、幼稚園と英語専任教官の辞令が発令されている。これまでみたように、各収容地区は八月頃から徐々に戦前の教育行政組織が機能を取り戻してきた。

照屋義一(琉球大学守衛)

照屋 島を風呂敷で包むように、敵艦がびっしりと、跳んで隣の船に渡れるようでした。

― いきなり攻撃が始まったんですか。

照屋 始め、偵察機グラマンかロッキードが来て測っていった。

― 本土も、グラマンにはやられました。

照屋 それから暫して、艦砲射撃が始まりました。小さい子は隠ていたから分からなかったでしょう。親はこの攻撃でやられました。飲まずくわすだったので自然壕から這い出し、死体のポケットを探って黒砂糖をとってなめました。

— どこで救助されたんですか

照屋 塩平で集められました。真裸ではだしでした。久志村、今の名護のキャンプに収容されました。

— 食料はどうしました。レーションなんか与えられたんですか。

照屋 いや、始め米軍に救助されたとき、食べ物を与えられたんですが、誰もたべませんでした。大人が私に毒味をさせました。人間生きるか死ぬかの境目になると……（声をつまらす。大人たちは身寄のない子供に毒味させてから食べたようである。）

— 収容所ではどんな食べ物を与えられましたか。

照屋 米が入っているおじやみみたいなもの。

— 学校は青空教室で

照屋 家が残っていて、入りきれないのでテントも使いました。

— 勉強はどんなふうに行ったのですか。

照屋 アメリカ兵、二世だと思えますが、片言の日本語で子供を集め、アメをくれ、ABCの歌を教えてくださいました。今の小学生から中学生ぐらい。

ワラ半紙を配ったという記録がありますが（大内の思い違い）

照屋 何もありません。木の葉に書きました。そういうタイプの裏うらも使いました。

上原幸雄（神奈川県沖繩協会専務理事）

— 敗戦はどこで迎えられましたか。

上原 国頭の本部です。五歳の時でした。

— 慶良間のような悲劇はありませんでしたか

上原 直接攻撃をされませんでした。父はこの戦争は負けると言って食糧を確保し、兵隊のいない所に逃げました。JMC大型トラックで羽地の田井等収容所に運ばれました。どういう意味か分かりませんがカンパンと呼んでいました。

— 食べ物はどうでした。

上原 おにぎりなんかありました。大人も子供も並びました。早めに並んで二回貰ったり、人のものを取ったりする人もいました。

— 言葉はやはり…

上原 十人にひとり日系の通訳がいました。カンパンが出る頃、片言ぐらいは喋れるようになり、配給は沖繩人になりました。

— 学校はどこですか

上原 幼稚園がありました。

— そうですね。本土にはありませんが沖縄にはありましたね。

上原 伊豆味小学校に入学しました。尋常高等小學校の標札が随分あとまで残っていました。一年のとき、先生がガリ版の教科書を一冊持ってきて、黒板に書き、「お花をかざして……」と暗誦しました。キャッチボール、かけっこ、山歩き、ラジオ体操などよく体操の時間にやりました。四・五年頃から国語があり、五・六年でABCを習いました。英語はあまりやっていません。

— 教室はやはり青空で

上原 カヤを刈って木を切ってカヤぶきで。床がないから家からかます・南京袋を持ってきて、机も家から柔麺箱の空箱をもってきました。そのうち村有林から木を切り出し、大人の人が机を作るようになり、上級生から机が貰えるようになりました。

与座朝久(読谷小学校副校長)

— どこで敗戦を迎えられましたか。

与座 久米島の仲里です。六月半ばごろ

— 学校はいつ頃から始まりましたか。

与座 地域によって違います。戦闘が終り次第、教師が山の中で、子供を集め、学校らしきものが始

まりました。数の掌握から始めたようです。三ヶ月も山にもぐっていましたが、収容所に集められ、テントで蚤しらみだらけで、まずDDTをかけられました。

— DDTは私もやられました。衣食住についてお願いします。

与座 だぶだぶのHBTを着、戦闘帽をかぶったり、女の子もHBTを着ていましたね。リバックとって中にメリケン粉、チョコレート、缶詰などが入っているものが支給されました。

山からおりて屋敷が無くなっていました。山から木を切り出して、草ぶきの掘立小屋を作って住みま

— 机はなかったんでしょう。

与座 はい、素麺箱を机にしました。八月か九月頃、秋頃になってようやく生徒のメンバーも落ちついてきました。学校にこない生徒もいましたから。

— 当然校舎もやられてしまったのでしょうかね。

与座 はい。砲火をまぬがれた民家の大きいのが。クラブ、公民館ですね。戦前からクラブと呼んでいました。そこで勉強をしました。栄養失調でしたから学校でまいまいをスープにして食べさせてくれました。

— でんでん虫ですか。どんな勉強したんですか。

与座 何もなくて出来るもの。体育と音楽が主ですね。英語でTwinkle, Twinkle, Little Starを習

いました。私は三年生で、授業は午前中だけ。来ては帰り、来ては帰り、半年ぐらい何もしませんでした。戦後は身寄のない子供が田舎に來たり、養子になったり、一学年七十名ぐらいに、生徒数が戦後ふえました。

— 教科書は無かったんでしょ。

与座 戦争中山の中に持ち込んだ教科書があったようですが、先生方は使わず、手ぶらでした。八月頃、教科書を家から持ってこいと云われ、小さい子供は全部学校に出しました。日の丸も出せといわれ没収されました。

— 先生は女ばかりでしたか。

与座 男の先生もいましたよ。旧制中学途中の人も先生になっていましたね。

— ノートはみどり色の紙でしたか。

与座 白い紙が配られ、それを綴じて使いました。

— 一九四六年になるとガリ版教科書が出来るんですが。

与座 教科書を使った覚えはありません。先生だけが持っていました。「名護湾の海豚捕り」という文章をノートに写したり、繰返し暗誦しました。楽しかったですね。「公民」がありました。英語もありましたが教科書もなく、先生方は苦勞していたようです。あまりきちんと習っていません。プレゼントという単語を教えて貰い、プレゼント、プレゼントといって米兵に物乞いしたり。

— 一九四八年に新制中学になってから、本土から教科書が入って来ますが、英語でLet's Learnを使いましたか。

与座 はい。使いました。中学になるとちょっと教科書が来て使いました。

戦争は肉親を奪い、兄弟を離散させた。運よく生き延びた人々は收容所の中で親兄弟、親類縁者の安否を気遣い、軍作業のため往來するトラックの上に、父、夫、兄の姿を求めた。片や親兄弟を失った児童が多数放り出された。軍政府は養老院と孤児院を設置、身寄りのない老人と子供を收容保護した。

— 元玉城村百名國民學校生、大城将保の記録。

孤児院には常時数百名の孤児が收容されていたが、誰もその正確な数は知らなかった。引き取り手のない天涯孤獨の孤児だけが、いつまでも村の孤児院に居つづけたのである。

孤児院は同級生がたくさんいた。……そういう廃墟を横にながめながら、難民收容所で早くも学校が復活していた。戦用テントを地べたに張っただけの数十棟の教室に、生徒は身動き出来ない程びっしり詰め込まれていた。同級生の境遇は様々だったが孤児院の児童でなくても両親そろった家族というのは、多分一割にも満たなかったであろう。

次に比嘉永元が語った子供たちの様子を仲宗根政善に敷衍していただく。

石川の街頭をうろついている学童を見るとスパスパ煙草をすっているんです。レーシヨンの中に入っているやつを吸っているんですね。人々の服装も男か女か殆ど見分けがつかない。アメリカさんの洋服をつけたり、つぎはぎだらけのよれよれの服をまとして、夢遊病者のようにうろつきまわっている。裸足の者も多い。いちばんショックだったのは、塵捨場にたかっている学童の群を見た時でした。

古川という二世が国頭へ行くとき開いたもんだから……やがて恩納に近づいたところ丘の上に大きな塵捨場がありましたね。そこを通ったとき、袋をかついだ少年がいっぱい群がっておるんです。……いわゆる戦果探しに恩納の方まで石川からずっと遠出してたわけです。そういう少年たちが、無数に塵捨場に群がっているんですよ。つぎつぎとトラックが塵を満載して運んで来ては捨てると、そのもうひとつとした黒煙の中から袋をかついだ小さな乞食の群がたかっているんです。彼らは、履物もろくになく裸足で駆けずり廻り、足の裏は靴底のようになっていたが釘や葉莖の破片でよく怪我をした。しかしそんな事はものともせず、ハロー帽や日本軍の戦闘帽をかぶり、HBTの更生服を着て、元気に野山を駆けめぐった。白骨や弾薬が散乱する防空壕、鉄兜、軍靴、日本刀、飯盒が散乱する塹壕、放置されたLST、戦車、横転したトラックが彼らの遊び場だった。至る所で艦砲の穴があり、雨が降るとすり鉢のプールになった。水難事故も起き、親や先生が注意しても子供らはきかず、水泳やフナとりを止めようとしなかった。軍政府からの注意もあり婦人警官や教師が追いかけて、掴まえて学校

に連れ戻しても、きくめがなかった。一方では年相応に豚や山羊の世話をし、藩堀り、稲刈り、弟妹の面倒をみた。親を失った年かきの子はハイスクールへ行く友達のを横目で見、年齢を偽って軍作業にもぐり込んだ。

註

1. 『沖繩の証言』上(一九七一年)一〇〇頁
2. 琉球史料Ⅲ 六一九頁
3. 照屋(一九三九年系満生れ) 一九九二年四月二十日、面接(琉球大学守衛室)
4. 一九九二年八月二十四日 面接(川崎市立図書館)
5. 一九九二年十一月二十七日 電話による聴取
6. 戦前の教科書を没収したのはTechnical Bulletin C3に則る措置である。日の丸の没収はニミッツ布告、戦時刑法第二号による。23 WARCIMES ARTICLE II OFFENSES WHICH MAY BE PUNISHED BY OR IMPRISONMENT anyone who: 23 Displays the flag or colors of Japanese Empire or plays its anthem: の刑法はあちとあちまで問題を惹起することになる。
7. この教材はよほど印象に残ったとみえ、屋我地初等学校卒の上江洲三郎も「紫式部」と「名護湾の海豚捕り」を記憶している。屋我他小学校創立百周年記念誌(一九六三年十一月)三五二頁 しかし現場の教員からはむごたらしいと苦情が文教部に寄せられた。
8. 大城保『沖繩戦』高文社(一九八五年六月)一六頁 孤児の多くは照屋義一のように親戚にひきとられたり、米兵にひきとられたり、(玉那覇春子はアメリカへ養女に行く筈だった)、または養子になった。一九

十一 諮詢委員会と文教行政

軍政府政治部長マードック中佐は沖繩の行政組織の再建に着手、軍政府の諮問機関の設置に乗り出した。マードック中佐は、戦前沖繩に住んでいた丸本正次中尉に人選を一任した。中尉は六週間かけて候補者リストをつくりマードックに提出。さらにCICに身元を調査させ、各収容地区より二十四名を選び、トラックで石川に運んだ。会場は石川学園。八月十五日奇しくも日本帝国敗戦の日であった。屋我市長の司令で開会が宣言され、軍政府の根廻しで志喜屋孝信が委員長に選ばれた。

ムーレー大佐が日本の敗戦を伝え、「沖繩ノ方ニ対シテハ、今後トモ保護シ、復興ニ努力スル」と挨拶、九項目の施政方針を読み上げた。丸本中尉が通訳と解説にあたった。教育に関しての方針は次のとおりである。

- (1) 沖繩児童ノタメ、民間教師ヲ使用スルヨウ小學校制度ヲ設ケルコト。教材不足ノタメ、軍政府及ビ沖繩教育家ニ於テハ周到ナル計画ヲ要ス。
- (2) 後日高等ノ教育、特ニ職業及び工芸教育制度ヲ設ルコト。
ムーレー副司令官の声明に対し志喜屋は次のように謝辞を述べた。「私達ハ今ヨリモ努力シテ、沖

繩ノ黄金時代ヲ再現スルヨウ決意スル。嘗テハ沖繩ガ人材ヲ輩出スルニヨリ、偉大ナル業績ヲ現シタ。蔡温先生ノ時代ヲ想イ起コシツツ、邁進シテ。御期待ニ副ウヨウ決意シマス。志喜屋の「蔡温の黄金時代を」は、この時から沖繩再建のキーワードになった。

八月二十九日の諮詢委員会で委員長以下十二部門の部長を互選した。その多くは元教師であった。
委員長 ○志喜屋孝信、幹事 松岡政保、総務 又吉康和、公衆衛生 大宜味朝計、法務 前上門昇、教育 ○山城篤男、文化 ○當山正堅、社会事業 ○仲宗根源和、商工 安谷屋正量、農林 ○比嘉永元、保安 中村兼信、労務 ○知花高直、財務 護得久 朝章、通信 平田嗣一、水産 糸数昌保、(○元教員又は教員経験者)

蔡温の黄金時代は当時の知識人にとっては、ごく自然な発想であった。霜田正次は『沖繩島』の中で志喜屋の挨拶に次のような解説を加えている。

それは蔡温の政治力や政治理念に直接学ぼうというよりも、もっと根本的には、いまこそ、われわれは蔡温時代のように、われわれ自身の手で沖繩の政治をやることができるという喜びと自信に違いなかった。……将来なんらかの形で、この島がアメリカの統治を受けるようになれば、日本時代には望めなかった民主的な統治が予想され、経済的にも援助が期待される。そうならば第二の黄金時代も夢ではない。そう考えたに違いなかった。

軍政府の部門に対し、専門部会が設置され専門部長は諮詢委員が兼任した。教育の専門部員には、

教科書編修所員がなった。以下諮詢委員会議事録に依り、教育行政の復興過程を跡づけることにする。軍政府マードック中尉は地方行政機構の（市長、市議員の選挙）編成を緊急課題として、諮問を求めてきた。そのため諮詢委員会はまず手始めに島中を一巡し、現状把握を行った。

九月五日（水）の視察報告会で山城は、「一、学校二校舎ナシ 二、学生ガ遊ンデイル、之ヲナントカシテホシイ。之ニツキ腹案ナキヤ否ヤ。少クトモ早急ニ一、二教室デモ建設シテホシイ」と軍側に要望したが、軍は「一、二共、係リノ隊長ト相談スルヨウニ」と答えている。選挙の準備のため、教育は一時棚上げされ、本格的に話題になってくるのは十月に入ってからである。ハンナ大尉の要請がマッカーサーの命令か定かでないが、大尉は九月二十二日から十月一日の間にGHQ/SCAP教育課を訪ね、コロビアSMGと共に学んだホール大尉、バンス大尉、ワンダリック少佐に会っている。沖繩には一冊の教科書もないというのに、東京は全然、気にもかけず、何の手だても打ってくれない。かりに腰を上げたとしても、それはずっと先きになると判断し、ハンナ大尉は東京へ向ったという。

沖繩の方が東京よりはるかに進んでいるのに驚いた。彼らは教科書から軍国主義的、超国家主義的教材を削除するという問題に対し、しかと認識していなかったとハンナは云う。ある朝、マッカーサー司令部の教育担当将校を訪ね、長時間会議し、有益な情報を得た。私は彼らがどうやら驚いたり呆れたりして私を見ているのに気付いた。彼らは新教科書編修に関しては、まだ何も話し合っていないかっ

た。それは一年先き、あるいは二年三年先きの問題らしかった。

C・I・Eがいま問題にしているのは、日本語の表記法であることをハンナは知った。ホール達の主張は新しい表記法を採用すれば、教科書の執筆が、はるかに易くなるであろうというのである。ハンナ大尉は宣教師の子とし、日本に住んでいたので、読み書きも自由に出来たから、なにもできない素人言語学者たちにおおいに反論した。彼らの主張はこうである。伝統的表記法である漢字と仮名を廃し、ローマ字表記に切り替える。そうすれば仮名と漢字がびっしり並んだ旧来の教科書は将来、読み易く、理解し易いローマ字で書かれるようになるであろう。ローマ字は外国人にも読めるよう、日本語の表記の一部としてすでに使われているのである。

”平易”なんと不毛な。私はその考え方にあいた口がふさがらなかった。漢字と仮名を廃止するということは、とりも直さず書道をほおむり去ることであり、漢字と仮名で書かれた文のもつ深い意味を失わせてしまうことである。それは社会の隅々に行きわたっている日本固有の文化を破壊することになる。しかし、彼らの言語教に改宗させ、布教の先達にしようとならば躍起になって説いた。私は暗胆たる気持で議論を打ち切った。秀才肌で傲慢なホールと、誠実・温和なハンナとは所詮水と油であった。ハンナは辟易して、頭に血が上っていない日本の教育者（有光教科書局長であろう）に会い、小学校用教科書全教科一揃いと、大袋二つ分の教科書を貰い、船便で送った。しかし、手違いでマニラに送られてしまい、待てとくらせど届かなかった。

ハンナ博士は、何もいっていないがハンダーソン Harold G. Henderson 課長か、フアー Edward F. Fair 課長補佐に会い、教科書以外の件について有益な話し合いをもった。それは教科書編修にさいし、山城に示した指示を見れば明らかである。

九月二十九日(土) 協議事項 一、主トシテ語学問題 二、幼稚園問題

語学問題についてどのような問題が話し合われたか議事録には何も記されていないが仲宗根源和は次のように語っている。

私には一つの目的があった。私は英語教育について、文教部の考え方がナマヌリイと思っていた。小学校の四・五年になってから英語を始めるようでは駄目だと私は諮詢会の全体会議の時には、山城文教部長に向って意見をいうが、山城部長はなかなか賛成しない。余り早くから英語を始めると子供の負担が重すぎるという説である。私はそれと反対に、言葉はなるべく早く始めるべきで、幼稚園から耳と口で英語のおけいこを始めれば、決して負担が重くなるとは思えない。文字を書いたり、読んだりすることはゆっくりでかまわぬ。そして小学校を卒業する時には、日本語と同じ程度に英語を聞き、読み、書き得るように 地理も歴史も出来るだけ英語でやるのがよいという積極論である。

仲宗根は使える英語という Practical な立場から、幼稚園からバイリンガル教育をすべしと強く主張したが、英語教育の専門家である山城は、言語と民族の観点に立ち、仲宗根に組しなかった。山城の信念は日本語による日本人の教育であった。次の記録がそれを語っている。「戦いに敗れ、米軍に

占領され、米軍の指導と監督を受けていると必勝の信念の強固であった者程、迷いと混乱の精神状態となる。過去の自分の進んで来た道への否定となったりもする。収容所生活の第一歩から英語の世界に入り、その必要性を日々体験させられていると、国語に対する不信論も動揺性も、当時の混乱時では、確かにあった。学校教育がいかなる方向へ進むか、実のところ問題にする向きを耳にしたことであった。その折石川市で文教のことを心配しておられた山城篤男、安里延先生から「言語教育はどこまでも標準語(日本語のこと)でいけ、迷う勿れ」との通知が来たのである。学務課職員学校職員が晴天を迎えた喜びと安定感に打たれた事実を忘れることが出来ない。」(瀬嵩地区・地方自治七周年記念誌)

仲宗根源和らの声も無視できなかったのか、英語は初等学校一年から必須科目に入ることになる。しかし山城を中心に仲宗根政善らの「ヨミカタ」「讀方」の編修作業が始まっており、日本語による教育はゆるぎないものになっていた。

十月二日(火) 志喜屋委員長「本日ハナ大尉、ハセ中尉が具志川ニ行ッテ其敷地ヲ調査シ、近ク同地ニ教員養成所ヲ建テヨウト思フ」三千余名いた教員の三分の一が戦死、残った二千名のうち半数は再び教壇に立つとうとしなかった

師範学校生を失い、生き残った中学生、高等女学校生、青年学校卒業生はもとより国民学校高等科卒業生までも教員になった。生徒を集めても先生がいないので教員養成は急を要した。教員養成は

Technical Bulletin d2 に則ったものである。

十月九日(火) 教育部専門部会は次の事項について協議した。

- 一、教育方針
 - 二、教育機関
 - 三、学校系統：大学、専門学校、高等学校、初等学校
 - 四、教育行政
 - 五、教科及び科目
 - 六、教科書編修方針
 - 七、教員任命
 - 八、教員待遇
 - 九、教員養成
 - 十、その他
 - 十一、初等学校令全施行規則
- いままでもなくこれらは、軍政府の方針に則り、ハンナ大尉の承認を得たものである。この協議事項は翌十日(土)に山城によって諮詢委員会に提案された。
- 十一、その他は次のように具体的な形で示されている。

計画案 実施案 義務教育

大学 — 専門学校 — 高等学校 — 初等学校

注目すべきはハンナと山城は大学の設置を考えていたことである。やがてこの案は一九四六年六月三日の将来の学校制度計画になっていった。

十月二十四日(水) 協議事項

山城委員 中等学校ノ最終学年ヲ如何ニシテ教育スルカ。農業学校ハ名護ノ試験場ヲ中心トシテヤッテ行フ必要ガアル。其他 生徒ヲ如何スルカ。

十月三十一日(水) ハンナ大尉は軍の方針を沖繩側に明示した。軍団主義的、日本的教材の禁止を

する一方、沖繩の教育再建に向け、建設的な方針を次々と打ち出してきた。

以下未決定デアルカラ秘密ニスルヨウニ。将来ノタメ学校制度ニスル方ガヨイ。専門学校ヲ建テタイ。土地ヲ諮詢会ト共ニ見タイ。例学校ハ機械・大工・教員養成、運転手等ノ学校ヲ設立シタイ。短期学校ニスル積デアル。第一ハ専門ヲ置クコトデス(大工等。諮詢会も移動スルコトヲ考ヘテエル。

ハセ中尉ヨリ土地視察ニ行ク委員ヲ指名ス、志喜屋、又吉、松岡、安谷屋、山城、知花、中村の諸委員。外仲宗根氏同伴。

この頃の教育現場の様子を軍政府報告は次のように記録している。

	学校数	生徒数	教員数
幼稚園	八	一、〇一六	二〇
小学校	四五	五八、七六八	一一〇
高等学校	七	二、四〇五	一一〇

これらの学校では一日約三時間の授業が行われている。教材が整い、改善されるにつれ授業は徐々に充実してきている。司令部から供給される教材には下記のものが含まれている。一学年用教科書 三千五百三十九名分、二学年用教科書 三百十名分、三学年用教科書 千二百三十名分

なお紙と鉛筆の支給は十分であるが、教科書は今なお準備中であり、出来次第学校に届けている。しかし原稿が上っても印刷に種々問題があって、供給できない。

十一月七日（水）

山城委員 教員養成ニツイテ説明ス。男女六週間、中卒ト師範予科出 教授ハ英語ノ初歩 新沖繩ノ建設、地理。百人募集。希望者ヲ募り、身体検査ヲ行フ。通訳学校。二十五人二組。三ヶ月。中等卒。師範予科出。其他英語ニ堪能ナルモノハ年齢不問。テストヲシテ身体検査ヲ行フ。両方ヲ兼ネル校長ヲ置ク。附属小学校ヲ置ク。

学課。教授ハ沖繩地歴等。専属教師ガ得ラレバヨイガ得ラレナクバ出張教授ヲヤル。通訳学校ハ男子ノミ養成ス。教員ハ三人デ、米人ヲ協力スト。

ハンナ大尉は十一月五日、七日の両日に、軍政府の構想を直接、あるいは山城を通して諮詢委員会に伝えたが、十一月九日付、軍政府指令第十九号、職業学校の設置についてで、明文化した。十一月二十一日うるま新報は次のように報じている。十一月二十日政府発表 新生沖繩の建設途上の原住民のため、前原市に十二月一日より、師範学校、英語教員養成所、警察練習所、機械技術養成所、コック及びパン製造養成所等が開設されることが決定、近く、他の学校も開設される予定である。

指令第十九号は「Technical Bulletin ⅢC 3(d) I 及び 2 の具現化である。
十一月二十四日（土）

山城篤男 男女共学ニ就イテ 初等学校ハ共学デヤリ、ハイスクールモ方針トシテ共学トシタイ。

中村兼信 戦前ノ道義ト現在ノ道義トハ異ツテイルガ男女共学ハドウカト思フ。

當山正堅 男女共学ニ賛成デアル

男女共学はハンナ大尉が山城に示唆したものであろう。これはSWINCC 108/1が沖繩に届けられている証左である。ハンナ大尉はGHQ/SCAPの教育課と打ち合わせをすると同時に、基本的には本土の教育政策文書に則ったとみられる。軍政府を追い打ちをかけるように十二月七日付軍指令八十三号を発し、教員養成学校 (Teacher Training School) 英語学校 (English Language School)、農業学校 (Agriculture School) 等設置の促進を図った。

十二月十九日（水）

山城篤男 ハンナ大尉ノ話ニヨルト来ル一月カラ文教部ハ文教部長ニ、スベテノ権限ヲ委譲スル旨話ガアッタ(ソノ案ヲ和訳シテ読ム)。これは「太平洋地域の米国海軍政府について」(一九四五年十二月十二日付)の第五項「沖繩住民の能力、素質および地元の環境に適應し、かつ前記目的〔自治体の早期確立など〕の早期達成の助けとなる教育計画を樹立する。」の具体化への第一歩である。

一方十二月二十四日（月）に次のような記録がみられる。ワトキンス少佐「英和及び和英辞典ヲ布哇ニ注文シテアルガマガダ到着シテ居ナイ」日系兵を主体とするD・キーンら語学特務兵はコンサイス辞典和英辞典をもっていたが、研究社の大英和・和英辞典は部隊に一冊程度しかなく、沖繩側に与えるこ

とは出来なかった。なぜ日本に注文しなかったのであろう。分離政策のあらわれと見るのは、うがち過ぎかも知れない。いずれにせよ辞典は不可欠であった。

註

1. 稲田正次『沖繩島』筑摩書房（昭和三十三年八月十五日） 三四―三五頁
2. W. A. Hanna 1991. 8. 1
3. 占領軍が依拠した基本文書は沖繩も日本本土も同じである。ハンナ大尉は次の二つの文書をもとにC・I・E教育課スタッフと有益な話し合いをもった。
CHQ/SAFPA一般命令第百八十三号「民間情報局」Civil Information and Education（一九四五年九月二十一日付）およびフマー陸軍少佐によるスタッフ研究“The problem of Control and Redirection of Japanese Education”（一九四五年九月二十九日付）
4. 仲宗根源和 前掲書 一四八頁
5. Report of Military Government Activities for October 1945 ワトキンス文書 法政大学沖繩文化研究所蔵
6. SWIN CC 180/1 はGHQ/SAFPA一般命令第百八十三号として発せられたが、軍政官にはマニュアルの中示された。Manual for Military Government P. 57 “MISSION - The mission of military government in civil education is to provide essential guidance and assistance to the Japanese with reference to: a. The establishment of a democratic school system which will give equal educational opportunity....” AMERICAN OCCUPATION OF JAPAN AT PREFECTURAL LEVEL (1949) Layton Horner (元静岡県C・I・E教育課長)より重引

十二 教育行政組織の整備と教育養成学校

一九四五年十月から十一月中旬にかけて米軍の大規模な引揚げがあり、沖繩住民も旧住宅地への移動が始まったが「軍政地区が機能している間は、校舎や現実の学校組織化の問題は、地区担当将校に委ねられていた。司令部は学校計画を調整したり学校用具を供給したり、また正確問題を決定したりした」

軍の引揚げに伴い、接收されていた校舎、あるいは軍のコンセット、機械類、跡地の転用が可能となり、地元の校長は、さまざまな方法でそれらの獲得に腕を競った。沖繩の教育が地区担当将校の手から離れ、全島が中央機関の下に総括されたのは一九四六年二月以降である。一月二日付軍政府指令第八十六号 Directive No. 86 Subject: Okinawa Education System および一月四日付指令第八十九号 Directive No. 89 Subject: Establishment of Education Department により軍政地区の学校管理はすべて琉球軍司令部の教育部に引き継がれると同時に、その下に沖繩文教部が設置された。一月十一日の部長選挙ではワトキンスが山城を推薦したので、形だけの選挙の結果、山城が部長に決まった。

ハンナ少佐は総括に、次のように書いている。沖繩文教部との密接な協力関係にもとずいて、地方の各学校を指導することになった。そのため現在では、日常的な学校管理のあらゆる問題は、直接各学校と沖繩文教部員の間で処理される。

ハンナ・ハッセイ両大尉による教員養成学校建設予定地の実地踏査のあと、軍と沖繩側とで開校準備にとりかゝった。ハンナ少佐とサムソン少佐は三十棟ほどのコンセット、発電機、炊事場、ガレージその他工兵隊の機材類を点検、山と積まれた書類のサインに追われた。一息つくと、パイプベッド、毛布、ストーブ、Cレーションの調達に走り廻った。一方山城も軍に交渉し、建物、器具類の修繕をして貰った。山城はすでに、教員養成学校に恥じない教員を確保していた。

ようやく、開校の目鼻が付き、関係者一同Kレーションで空腹を満たし、空箱を燃やし暖をとった。軍政府はトラックを出し、島中から生徒を集めた。かくして一月十日、沖繩文教学校(校長島袋俊一)を開校した。学校は軍政府直轄で、経費は軍政府の負担、師範部・外語部・農林部からなり、修学年限は初等学校教員養成部が二ヶ月、外語部が三ヶ月、農林部が一年。また訓練科を設け、現職の教官補の訓練にあたった。在学中二十五円の奨学金が見込まれた。因みに、一九四六年三期生の募集人員は男子四十五、女子七十五名である。文教学校は一九五〇年その使命を琉球大学に継承し廃校となった。

第一期生の卒業式に招待されたハンナ少佐は「小さな樫の実も、必ず芽を出し、やがては大木となります」と式辞を延べて、若人達に沖繩の将来をたくした。

二期生宮城(旧姓兼城)喜久子の手記

二期生として入学した男女百五十人の中には、かろうじて命を得た、かつての鉄血勳皇隊員や女子

学徒隊員もいました。国のため命を投げ出して働くことが当然と思っていた十代の若者たちにとって、この新たな学校は、まるで違う世界でした。とまどいと半信半疑のなかで、それでも何が救われたような、ほっとした気持ちを抱いたものでした。「教育原理」「児童心理」などの中で、ひとりひとりの人間を大切にすることが教育の原点であると強調されましたが、これは私にとって衝撃的なことで、大きな変化を迫られたのです。

註

1. 川井勇 前掲論文 三〇七頁

2. 同右 “ 三〇七頁

3. Leonard Weiss “U. S. Military Government on Okinawa” FAR EASTERN SURVEY 一三三頁(ワトキンス文書第二巻 法政大学蔵) Weiss は元ハーバード大学教授、軍政府経済担当特校、Weiss は理論を、Laurence部長は実務を担当した。

4. 琉球史料Ⅲ 一一二頁

5. 玉城嗣久『沖繩占領教育政策とアメリカの公教育』東信堂(一九八七年三月二十日) 一一一頁 サムソン少佐について。一九六〇年国際見本市で「私は石川でハンナ博士の下にあって教育再建のために働いた。山田(真山)さんはお元気だろうか。私は山田さんの絵を持っている」と大城立裕に話しかけてきた。(『沖繩晴れた日に』家の光協会(昭和五十年八月三日)二五八頁 一九四六年六月十二日現在で、この表に「翻訳課」と編集課に「英語」が追加されている。翻訳課の課長には真玉橋朝美が任命されるが英語の主任は不明である。

6. W. A. Hanna (December 23, 1955) "Okinawa Ten Years Later."
 7. 『ひめゆりの乙女たち』朝日新聞企画部編(一九四六年六月十六日) 九二頁

十三 文教時報第一号及び教育課程

一九四六年二月二十六日、文教部は山城とハンナの連名で管下の学校長宛に通牒を發した。これは名実ともに戦後沖繩教育の原点といえる。

五、軍事的國粹的教育訓練ニ就イテはすでにTechnical Bulletin III. 3. Cの三項で見えてきたが、さらに一九四六年二月のGHQ教育課との協議もその背景になっていたものと思われる。柔道、剣道、唐手を許可しているのはハンナ少佐の見識である。本土では禁止され、CIE委員が山村の学校まで訪問、厳しく追求した。また連合軍から発せられた文書の閲覧の有無は署名・捺印を以て確認させられた。さらに密告までさせた軍政要員もいた。教育関係官ノ調査、除外、許可ニ関スル件(一九四五年十月三十日)など、ハンナには思いも及ばなかった。

陸軍軍政府時代になってから一九四六年八月二十二日(金)の軍民会で政治部長レイトン中佐が「残存ノ奉安殿ヲ破壊スル様ニスルコト」と山城に注意している。これはSWINCC108/1の「軍国主義的集會、軍歌合唱、天皇の写真(御真影)を中心に集る儀式、奉安殿の廃止」に則るものである。しかし、なかなか徹底しなかったとみえ、文教部は軍政府から注意を受け、一九四六年十一月七

日「軍国主義的歌謡並ビニ日本謳歌ノ絶対禁止」(文教第一八九〇号)の通達を出し学校長に警告している。

七の報告文書「特別報告(A号用紙、日英両語で記述)は各週各科目教授時数を求めるもので二十二種の科目名があげられているが、「時間配当ニ関スル件」では十八(十九)に整理されている。本土でも個人選抜を奨励した例もあるから、二十二や十八という数の背後には同じような意図があったのかも知れない。

本土C・I・E教育課は文部省内に教育課程編成準備委員会を發足させ、本国から資料を取り寄せ、文部省に示し指導助言している。文部省も戦前の画一教育の打破、公民科設置の構想、科学教育の刷新など自主的な改革に踏み出していた。このような本土の動向を吸収し、ハンナ少佐は沖繩に戻った。そして教科目配當ニ関スル件」及び「教科目内容表ニ関スル件」が成立した。「歴史」と「英語」はハンナの意向であろう。CIVICS(公民)はやがて本土でとれ入れられるが、教育課程改革のみについて言えば沖繩は本土に一步、先きんじていた。

軍政府と文教部は新たな一步に向け、次のような通牒を發した。

註

1. 『戦後日本の教育改革六』東京大学出版会、(一九七一年五月二十五日)六六―七〇頁
2. この時期C・I・E教育課は教育使節団を迎えるにあたり、土日を返上して準備に励んでいた。同報告書の基本文書となったEducation in Japan (一九四六年二月十五日)の草稿の一部ぐらい、ハンナ少佐に手渡したであろう。

十四 沖繩人としてのアイデンティティー

連合軍総司令部は一九四六年一月二十九日、日本政府に覚書きを發し、北緯三十度以南の南西諸島の行政分離を通告した。国務省はどうあれ、軍部はすでに軍政のための基本文書で、沖繩の解放を示唆していた。文教面では「日本史」の教授を禁止し、「沖繩史」と世界史(実はアメリカ史)を教えよ、日本的教材はいけないと、つとに分離政策をとっていた。

沖繩住民の胸中には、差別と重圧からの解放感と、心の奥底には親に捨てられた子のように大和への思慕が疼いていた。このアンビバレンツを軍は巧みにとらえ、分離政策を押し進めた。彼らは沖繩人は日本人ではないとし、日本と沖繩の歴史・文化の違いを強調し、沖繩人としてのアイデンティティーを確立させようとした。米軍の政策を待つまでもなく、この時期、沖繩県民はアイデンティティーを求めて激しく揺れ動いていた。在京沖繩県人は伊波普猷を会長に頂き、比嘉春潮、松本三益、大濱信

泉、仲原善忠らが沖繩人連盟を結成(一九四五年十一月十一日、於丸ビル)し、沖繩県出身者の救済、帰還問題等を日本政府とGHQに交渉、一種独特の解放感がみなぎっていた。連盟は機関紙「自由沖繩」を發行し、精力的に活動。関西支部の機関紙はその名も「解放沖繩」。当然のことながらマッカーサーは連盟の活動を認め、九州支部代表がマッカーサーに会い、帰還問題を要請したさい、マッカーサーは「沖繩五万の引揚げ民は日本帝国主義の犠牲であると大いに同情を寄せた。(自由沖繩九州版一九四六年七月五日付)

日本共産党(徳田球一)は沖繩人連盟全国大会(一九四六年二月四日)にあたり、沖繩民族の独立を祝うメッセージを贈っている。曰く「日本の天皇制帝国主義の搾取と圧迫に苦しめられた沖繩人諸君が……多年の願望たる独立と自主を獲得する道につかれたことは」

軍政府指令第一五六号「沖繩中央政府創立に関する件」によりムーレー副長官は四月二十四日付で志喜屋を知事に任命。翌二十五日諮詢会食堂で、ワトキンス以下軍関係将校および沖繩の司法・行政はじめ各界より二百五十余名が参列、沖繩民政府の誕生ならびに沖繩人知事の就任を祝った。住民は米軍を解放者として遇し、アメリカの庇護のもと、沖繩ビトによる沖繩國を夢みた。いやほち切れんばかりの願望であった。四月二十六日、うるま新報は言う。「住民待望の沖繩民政府は沖繩史上輝かしい一頁となって逞しく発足した。思えば一年前、誤れる日本軍閥の犠牲になって郷土は完膚なきまで破壊しつくされ、ひとときは暗沮たる沖繩人の前途であったが、沖繩戦終了と同時に、沖繩再建

と住民の保護に献身的努力を惜しまなかった米軍政府は平和的道義の下、今ここに吾等の郷土沖縄を解放してくれたのである。」また社長島清は「知事就任を祝す」と題し、次の一文を寄せた。「琉球王国が沖縄県と改称され、沖縄世が大和世に変わり、封建制変じて自治制となりしも、そは名のみ。政治行政の真相依然として植民地的官僚行政であり、吾々うるま住民は永年植民地的重任に呻吟し来りて、敗戦国民として今日の非運を迎へた。…講和條約の締結をみるまでは、米軍からすれば吾々は敵人たる立場にある。然るに吾々を敵人視せざるのみならず、今茲吾々うるま島人より政治の総元締たる知事や副知事を選任されたことは…後世の史家は今日のよき日を永久に讃えるであろう。」

自由沖縄（六月十五日付）も高かに論じた。「…われらの胸は高鳴る。思つてもみよ。われらが五体に流れる民族の血を。嘗は王国として四海に雄飛し、東西文化を接受して、一個の風格ある琉球文化にまで体系づけて来た祖先をもつ我々が…」また沖縄人連盟九州本部は民政府宛にうちなあ口でメッセージを贈った。

「…沖縄や大和の無理な戦引起ちやる為に浅ましい形になやびたん…」大和からの解放、歴史への回帰そして民族のアイデンティティ確立への希求は沖縄知識人の間で、距離をこえて交感し合った。この時期、沖縄住民の心は帰属を求めて揺れ動いていた。「…終戦直後に人民投票をしたならば、アメリカ領属が圧倒的多数を占めた筈である」と池宮城はいう。人々は沖縄を第二のハワイと呼んでいた。事実諮詢委員会議事録にも布哇の同胞という文字はよく目につくが日本の同胞という文字は

見あたらない。沖縄住民は三十度以北の人間をジャパニーと呼んで自分達と区別した。民政府時代の議事録には日本が話題になるが、はっきりと距離感が伝わってくる。

大和からの独立をいち早く決意したのは「徳田球一の盟友仲宗根源和である。ポツダム宣言を読んだ八月中旬、仲宗根の胸中に琉球独立論がはっきりと形をとった。彼は機会あるごとに独立論をぶち、山城善光、瀬長亀次郎と沖縄民主同盟を結成（一九四七年六月十五日、宮森初等学校）。一、沖縄人の沖縄確立 二、民主主義体制の確立 三、内外全沖縄人の連絡提携 四、講話会議への参加 五、日本政府による戦災の完全補償などのスローガンを採択した。民主同盟は恒久政策として独立共和国の樹立をうたっている。教育に関して注目すべきは、一、留学制の確立 二、教育界の革新である。留学制の確立はアメリカへの留学、そして早期英語教育論に結びついてくる。二は山城篤男ら民政府文教部に対する批判である。皇民化教育の先兵だったのに、その責任を問われないうちに、戦後教育にたざさわっていると舌鋒を向けた。一代の雄弁家仲宗根の弁舌に心動かされた教員も少くあるまい。宮古教育会議開紙『宮古教育』（一九四七年九月）は創刊の辞で「軍国主義の強制と封建イデオロギーの桎梏から解放されたわれは真実なる『われ』の覚醒を得た」と述べている。敗戦直後、宮古の指導者層は戦時中のまゝであった。旧来の権力機構に対する不満が青年層を中心に高まり、三千人の聴衆を集めた郡民大会に結実（一九四六年三月平良市）。大会は民主主義を中核とする新しい体制をアピールした。旧体制の虚構をゆさぶる台動は教育界にも波及した。否、その中心を担ったのは若

い教員たちであった。「南部南西諸島住民に告ぐ」(一九四六年三月)により、宮古は沖縄本島と分離され、中国帰属の流説も流れ、住民を不安に陥し入れた。住民の意識は、宮古新聞記者団の軍政府に対する要請(一九四七年八月)に見ることが出来る。「中国が先島を領有することについては、吾々は絶対に反対である。琉球人は琉球という独立国で、アメリカの保護の下に生きていくことを望んでいる。」

この意識は宮古社会党結成大会(一九四七年十月十一日)の綱領に結実。曰く「我党は琉球民族の幸福は、米国帰属にありと確信し、将来の沖縄州の実現を期す。」

このような文脈の中での「宮古教育」のいう真実なる「われ」とは「沖縄(琉球)人としてのわれ」ととるのが自然であろう。

ところで沖縄人知事志喜屋孝信は独立あるいは沖縄人としてのアイデンティティーをどう考えていたであろうか。志喜屋の女婿嘉陽安春にたずねてみる。

— 大田さんは、志喜屋知事が独立を希望していたと書いていますが、本当のところどう考えていたのでしょうか。

嘉陽 思想界が混乱していて、独立という声もあったが、反面そう簡単には考えられないし、占領下では他に頼れないから、自分たちだけでやって行かなければならない。生活をどう切り抜けてゆか。志喜屋先生は島田知事の「断じて行へば鬼神も動く」に対して、左や右ということではなく、アメリ

リカの下で最善の道をつくって行かなければならないというふうに考えていました。

— 軍政府当局はどうみていたか、四月二十五日の祝賀会に出席した ローレンス師にきいてみる。

— 民政府が樹立された当時、独立といったムードがありましたか、この点について何か耳にしましたか

ローレンス 聞きましたとも。米軍が沖縄に第一歩を踏み入れたときから、沖縄人は噂と違ってアメリカ兵が親切だと分かり、自決を止めました。アメリカ兵は親切に振舞い、沖縄人も友好的でした。アメリカ兵は進んで彼らの力になろうとしましたし沖縄人はなんかこう兄弟のように対応してくれました。我々は彼らにアメリカ人になって欲しい、アメリカの一部になって欲しいと思いました。独立を願う沖縄人も可なりいましたが、独立についていろいろと考え始めてみると、その可能性は殆どないと悟り、ほどなく、日本復帰という考えを受け入れるようになりました。たしかに彼らはアメリカ人になりたがっていました。(They did want to become Americans)

註

1. 池宮城秀意『沖縄のアメリカ人』サイマル出版(一九七一年六月二十日)八六頁
2. 仲宗根勇「沖縄民主同盟——立ち枯れた沖縄独立共和国の夢——」『新沖縄文学』 沖縄タイムス社(一九八二年九月)三一頁
3. 沖縄県教員組合宮古支部『宮古教職員会二十年史』(一九七三年九月)九頁

4. 平良好児「宮古社会党——帰属の不安と独立の思潮を背景に「米国沖繩州を構想」『新沖繩文学』前掲四二—四三頁
5. 大田昌秀「沖繩の帝王・高等弁務官」久米書房（一九八四年十二月十七日）七四—七五頁
6. 一九九三年四月八日 電話による聴取
7. 一九九三年三月二十六日 面接

十五 GHQの言語政策 沖繩方言による学校教育

祖国防衛のため生命を賭して戦っていたとき、沖繩県民は母国を話すことが出来なかった。スパイの汚名を着せられ命を奪われる危険があった。第三十二軍は次の指令を発していた。「…五、爾今、軍又軍属ヲ問ハズ、標準語以外使用ヲ禁ズ 沖繩語ヲ以テ談話シアル者ハ間諜トミナシ處分ス」 琉軍會報 昭和二十年四月九日付 敗戦により住民は皇民化教育から解放された、押し込めていたうちなあ口を取り戻した。厭わしい方言札も過ぎ去った悪夢となった。日本から分離され、大和への愛憎をうちなあ口で佛桑花に訴えた。そして山田有功のように大和口を捨て、声高にうちなあ口で通す人も出てきた。この辺の事情を大田は次のように語っている。「戦時中に、一部の日本軍人が地元住民に暴虐な態度をとったことや過去の日本語による日本化の行き過ぎなどが原因で、敗戦後は一時的ながら、日本や日本語そのものに対する反発や、不信が表面化したことがありました。それが独立論の

立場をとったり、沖繩語による学校教育を要請する声になって現れたのです。まあ一種の反動的時期だったと言えますでしょう。

大田のいう沖繩語による学校教育を要請する声の主は独立論者仲宗根源和である。一方米軍も沖繩方言で教育を行わせようとした。仲宗根政善の言。「大宜味朝計がぼくの所に来ましてね。エー政善。教科書ン方言サーイ書カリミというんです。『君冗談いな。哲学書を一頁でも方言で翻訳できるか』というと『ヤラヌー アメリカータムルムノーワカラン』と……ということ覚えてます。直接聞いたことではないのですが、又吉康和さんもそういう話をしておられたということを見ました。— そういう話といえますと

アメリカ側から、諮詢委員会に方言で教科書を書いたらどうかという諮問があったということです。正式の議題になったかどうかわかりませんが、

諮詢委員会では正式の議題としてとりあげられた形跡はない。しかし東京の沖繩人連盟には諮詢があった。比嘉春潮の証言がある。

郷土沖繩では現在日本の教科書で教育しているが、将来は沖繩独自の教科書を編集することにより、目下準備中で、それには、琉球語も多少取り入れ、言語と民族とのつながりにより、愛郷心をよび起こす方針と伝えられるが、沖繩連盟では、左の見解を総司令部当局と民政府に開陳した。

一、学校教育に方言を取り入れることについて。 全部にせよ、部分的にせよ、学校教育に方言を

取り入れることについては、沖縄人の大多数は不賛成の意を表している。その理由は、

- A. 沖縄の青少年はもちろん、沖縄人のほとんど全部が、すでに日本語を十分体得しており、かつ沖縄方言の語彙が少なく、思想の発表・知識の吸収には日本語より不利である。
- B. 学校教育に方言を取り入れた場合、特に科学方面で非常に困難があり、そのため文化がいつそう遅れる。

C. 言語は環境の変化とともに成長するものである。今後沖縄が国際的に文化の交渉が頻繁になった場合、国際語として不適当である。

D. 沖縄は島々によって方言が非常にまちまちである。方言基準の設定や教科書への取り入れ方等、技術方面に困難があるとともに、混乱をきたす恐れがある。

E. 方言による教育は現地における教師および生徒がすでにその不便・不利なことを十分経験している。

F. 沖縄関係の文献はほとんど日本語による記録であって、沖縄語による記録はきわめて僅少である。たゞし教育課程において題材を郷土にとるとか、琉歌等を引例的に取り入れる程度は、地方色を盛る意味において必要と認める。

いつGHQから諮問があったか定かではないが、民政府成立前後と考えれば一九四六年二月か三月頃ではなからうか。一九四五年九月から一九四六年半ば頃までGHQではホルルの日本語表記のロー

マ字化問題がおきていた。マッカーサーも関心をもち、教育使節団のローマ字表記勧告に慎重論を述べた。CIE教育課が、沖縄の言語政策に口を出す程暇は無かった。「沖縄の教育を方言でやっただけ」といったのは誰であろうか。沖縄人は日本人ではないと公言していたマッカーサー、その人以外には考えられない。マッカーサー記念館の専任司書E. ブーン Edward J. Bonnは、沖縄方言で教科書を書いたらどうかと示唆したのはマッカーサーであると言っている。

沖縄軍政府は次の指令を受けていた。 The education program should foster and encourage instruction in the native language and history and native arts and crafts. 沖縄方言による教育、沖縄の歴史、芸術、工芸の保護・奨励は自由琉球運動の文脈に連るものである。沖縄方言問題は、さらに後まで尾をひくことになる。

註

1. 嘉陽安春『沖縄民政府』久米書房（一九八六年十二月十七日）八頁
2. 大田昌彦「軍政下の沖縄」『日本占領軍その光と影』思想の科学研究会（昭和五十三年九月十日）一五七頁
3. 仲宗根政善『占領下の教育裏面史』（一九八二年一月）一八八頁
4. 仲宗根政善 前掲書 一八八頁 大直味は県立一中の同窓生で言語学（方言学）に明るい仲宗根に相談した。
5. 比嘉春潮全集 沖縄タイムス社（一九七二年十一月一日第三卷）三八―三八頁、『言語生活』筑摩書房 昭

和三十八年七月号 九頁

6. 林 茂雄「マッカーサーの手紙」 図書出版社（一九八六年七月十日）九五頁 および一九九二年九月九日 電話による聴取

7. ゴートン・ワーナー「前掲書」 二六頁 なおUSCAR教育部長ワーナー博士は、この一文は英語教育を奨励していないから、教育計画としては大きな弱点をさらけ出したものであると批判している。（二七頁）

十六 初等学校令と初等学校教科書編修方針

文教部は一九四六年四月初等学校令、及び同施行規則を公布した。

初等学校令 第一章 目的

第一條 初等学校ハ沖繩建設ノ精神ヲ体シ、初等普通教育ヲ施シ、児童心身ノ基礎的鍊成ヲ為スヲ以テ目的トナス。

これは戦前の國民学校令の条文「國民学校ハ皇國ノ道ニ則リテ、初等普通教育ヲ施シ、國民ノ基礎的鍊成ヲ為スヲ以テ目的トナス」にならっている。が、皇民化教育の流れと完全に断絶している。日本本土で国体護持が叫ばれ、教育勅語排除に関する決議がなされたのは一九四八年六月十九日である。当時CIEは教育勅語に代る勅語を模索していた。日本の戦後教育の第一頁は沖繩から始まった。初等学校令施行規則 第二章付則

一、初等学校ニ於テハ新沖繩建設ノ精神ヲ体シ、其ノ使命ヲ自覚セシムルコト。

三、自治ノ精神ヲ會得セシメ、ソノ訓練ニ努メルコト。

四、沖繩文化ノ向上ヲ図リ、東亞及ビ世界ノ大勢ニ就イテ知シメ 特ニ米國ノ國情ニ通セシメ宏大ナル理想ヲ與フコト。

五、沖繩人ノ業績ヲ顕揚シ、其ノ短所ヲ匡正シ、長所ヲ啓悟シ、特ニ世界ノ情勢ニ伴ヒ、來ル各種ノ弊ニ陥ラサル様注意スルコト。

六、海外發展ノ思想ヲ培ヒ、積極進取ノ意氣ヲ養成フト共ニ教養ヲ深メルコト。

略

『新沖繩建設ノ精神』に關し、沖繩の道とは何か、文教部内で論じられたが、とくに安里が會議をリードした。海洋發展史を研究していた安里は、沖繩の道とは沖繩の歴史を貫く舟楫を以て、津梁となす發展精神であるとし、萬國津梁の鐘の銘文を援用した。安里は四海を家となし、諸外國の長所をとり入れ、自家葉籠中のものとなし、世界文化の昂揚に努めるといふ發展包容の精神を強調した。

三の自治の精神に關し、仲宗根の解説がある。新しい教育法は民主々義的な教育ということでした。が、実は民主主義なんてという言葉はまだダブーの頃でした。石川市の石川学園で、安里延が民主々義の講演をしたところ「アメリカのイヌども」と聴衆から怒鳴られ、えらい目にあつて、それからしばらく民主主義という言葉は使わないで、自治精神を昂揚する、自主自律の精神を養うということに

しました。ついで一九四六年六月三日に初等学校教科書編修方針を発表した。

一、偏狹ナル思想ヲ去リ、人類愛ニ燃エ、新沖繩建設ニ驀進スル積極進取ノ氣魄ト高遠ナル理想ヲ興ルコト。

二、沖繩ノ向上ヲ図リ、其道德・風俗・歴史・地理・産業・経済・衛生・土木等ニ關スル教材ヲ多ク採リ、以テ教育ノ基礎ヲ茲ニオクコト。

三、東亞及ビ世界ノ実情ヲ知ラシメ、特ニ米國ニ關スル理解ヲ深メルコト。

七、ローマ字ヲ採用スルト共ニ漢字ノ制限ヲ行イ、以テ世界ノ情勢ニ適應スルコト。

八、高学年ニ於テ英語ヲ課シ、将来ニ於ケル実生活ニ資スルコト。

七、は、アメリカ教育施設団報告書之二、「國語の改革」に基くもの。推定だがハンナ少佐は四月初頭か五月初頭にGHQに行き、教育使節団の勧告に関し、CIE教育課から説明を受けたのではないだろうか。その折報告書を入手しているが、ハンナ少佐が入手した報告書は縮約版であろう。

八、は、当時としては当然であつたろう。ハイスクールを卒業しても文教学校に進学できた者は、一握で、大半は軍作業につかざるを得なかつた。

一九四六年六月三日までに、米軍政府の教育政策と、沖繩文教部の教育理念は、ほゞ出つくしている。それは(1) 恒久基地化構想JCS 570/40の帰結として分離促進・日本的なものゝ否定(2)

沖繩人としてのアイデンティティ確立(3) 米軍に依存しなければ生きていけないという現実か

ら親米あるいは対米協調(4) 民主主義教育 以上四つにまとめられよう。

註

1. 横浜市を皮切り天皇は全国を御行され、親しく国民と言葉を交わされた。しかし私の村を御召列車が通過するということで、全校生徒が踏切に出迎え、列車が近づくと面を伏すように云われ、顔をあげたとき、列車は遠くを走っていた。教師の天皇陛下に対する意識はすぐに変らなかつた。

2. 那覇市史資料編第三巻八『市民の戦時・戦後体験記 下』一三七頁

十七 ガリ版教科書

山城が十月十日の諮詢委員会で、教科及び教科書編修方針について発表したが、これは科目と編修方針の大綱ができたことを意味する。英文学者であるハンナ大尉は教科書は云うにおよばず、書籍を大事にした。戦禍が沈まって間もなく、嘉手納ロータリー附近から多数の書籍を集めておいたが、無知な兵隊が、それを焼いてしまったので大いに憤慨するという一幕もあつた。

仲宗根は教科書編修の資料を求め、フルカワ伍長と、安里、首里方面まで、出かけてみたものゝ徒勞に終ることが多々あつた。仲宗根らは、参照すべき教科書を入手してほしいとハンナ大尉に頼んだ。大尉は日本の文部省に飛んだりしてスミぬり教科書も入手し文教部に届けた。さらに戦前教鞭をとつ

た上海の商業学校に行き教科書を送った。開けてみると一冊一冊に、わが同胞へ、長い間日本压制に苦しめられてさぞつらかったであろう。やっと解放されたから、これからは一緒に手をとり合って行くこうというメッセージが貼られていた。ハンナ少佐がそれを見つけ回収、メッセージをはがして、一部を返してくれた。しかしこの教科書は、あまり参考にならなかった。

結局、編修課は宜野座国民学校に疎開させておいた沖繩師範男子部附属の教科書を参照せざるを得なかった。

仲宗根は執筆にあたり (1)でできるだけ易しい文章を心がけるように、また努めて科学的教材をとり入れるよう課員に要請した。さらに敗戦によって県民はみな茫然自失していたので (2)新沖繩建設の意気を高めること。 (3)生命の尊さを自覚して、積極的に生き抜いていくことを強調した。(1)はハンナ少佐が指示したものである。

1. 讀方

全教科の編修は無理なので「讀方」(仲宗根政善・喜久里真彦・嘉味田宗栄)、算数(山田勝政)、理科(比嘉徳太郎)から始め、一九四五年十二月に「ヨミカタ」の一部が完成した。国語はNational Languageと訳することになり、ここでは日本の言葉ということになり具合が悪いということでヨミカタ、讀方・文学(ハイスクール)としたという。ここに分離政策を読みとることができ。

(3)について仲宗根は次のように語っている。「戦争を体験して得たのは生命の尊さであった。生命

の中にしかあらゆる価値のないことを知った。生命を投げ捨て得ようとしたもののいかに虚しいものであるかを知ったのである。生命の喜びを感じれば感ずる程、死は虚しかった。生命を尊び、この生命の中にある価値を最大限に發揮することが教育の根本であることを痛感させられた。八年生の讀み方「首里城址の赤木」は生命の尊さ、復興の気概が余すところなく述べられている。教科書編修は仲宗根・喜久里が中心となり、軍政府側と折衝しながら進められた。原稿は眞玉橋が一語一句英訳し、常駐の検閲官バスがチェックした。仲宗根が第一学年の巻頭にアカイアカイ、アサヒ、アカイを入れようとしたときバスはテーブルを叩き、アメリカのシンボルは星であり、中国は月だ。日本のシンボルは太陽だろう。陽が昇れば星が消えると、どえらい剣幕で仲宗根に迫り、一週間も論争した。あけもどろのおもろもあるし、太陽は世界的なもので、日本だけのものではないと仲宗根は主張した。結局仲宗根が折れ、焦土と化した沖繩の上にひろがる素晴らしい青海と海を教材にし「アオイソラヒロイウシミ」にした。眞玉橋はBlue sky, Broad Ocean.と訳し、バスに見せたら即座にOK。しかしハンナ少佐は初等学校一年生には、あまり適さないじゃないですかと行った。案の定、現場からは、使いにくいとの声があがり、「ハトコイ、コイ」に差しかえた。「アカイ、アカイ」をとりあげたことに関し、後年仲宗根は「終戦直後だけに、まだ負けるものかという気持ちだが、どこかにあったんですよ」と述懐している。

バスとの衝突は、「羽衣伝説」を教材にしようとしたときにも起きている。三保というのは、日本

の地名ではないかとバスがねじ込んできた。山城が「向うがそう言うなら、三保を止めて、銘苅の松原にしたら」といったが、「とんでもない末代まで汚名を残すから、絶対に駄目」と仲宗根が主張。これは軍側が折れようやくおさまった。三保が日本の地名であるという知識をもっている人間は、ハンナ少佐以外にない。バスの背後にハンナ少佐の姿がみえかくれる。

なぜもなく執拗に、一切の日本的なものを否定したのであるうか。それはアメリカの対沖縄占領政策と深くかゝわっていたからに外ならない。すなわち一九四五年十月二十三日統合参謀本部はJCS 570/40により琉球列島の軍事権を排他的に所有すべく、沖縄を最優先軍事基地地域に指定したことがそれである。政治的に微妙な問題が絡んでいたためか、後年ハンナ博士は日本の教材の禁止には言及しない。

2. 沖縄歴史

ハンナ少佐は沖縄の文化と歴史に並々ならぬ理解と関心を持っていた。少佐の示唆により仲宗根は島袋全発に、沖縄史の執筆を依頼した。民政府が知念村に移ったとき原稿は九分どおり完成していたが、島袋が知事官房に転じて沖縄史は宙に浮いてしまった。仕方がなく仲宗根が上京、仲原善忠に依頼しようやく完成をみた。沖縄歴史は「くにのあゆみ」(昭和二十一年九月十日・文部省)の影響が濃厚である。厳しい検閲の下で、ようやく陽の目を見た「くにのあゆみ」を手本にしたのは当然で

ある。第一章「沖縄のあけぼの」は「くにのあゆみ」の「日本のあけぼの」と同じく石器時代から説きおこしている。「くにのあゆみ」は歴史的仮名遣いだが沖縄歴史は現代仮名遣いである。

本文三十九枚、序文に「本書は廃藩前までに止め、最近世史は追って出版するとある。教科書編修方針三を受け、三十一、三十二頁が「ペリーと沖縄」三十三頁は参考——、アメリカの歴史が簡単に記述されている。

3. 英語のエホン、英語読本

発足当時の文教部編修課には、なぜか英語主任だけが欠落している。課長の仲宗根は次のようにいっている。「英語の教科書は無かったんです。アメリカさんが軍隊用に使った日本語の手引書があったんで、それをひとつの参考にしたりしていました。山城先生が英語の専門でしたから、早く英語の教科書を作って下さるようお願いしたんですが……ちょっとあとになってから、安里源秀さんが本部とかで講習用に使ったというパンフレットが手に入りました。一年から八年までどの教室も、みな同じくStand up. Open the door. から始めていたんです。本当に英語の力はつかなかったんです。」

ハンナ大尉が自らタイプを打って作ったという英語の教科書はまだ発見されないが、英語の教科書は作られている。

『英語のエホン』(17cm×20cm、二十五頁)のれはI. A. Richards の『English Through Pictures』 Continental Editionを参照して作られた。このテキストを書いた人は、英語の専門家ではない。歴史的仮名遣いをしていいるから一九四六年六月から一九四七年初頭にかけて作ったのであろう。

『English-book 英語読本』1 Lesson 1-Lesson 23), 2 (Lesson 3-Lesson 37)

一九四六年に、本土からいわゆる暫定教科書が、何冊が送られてきたので文部省著作 Let's Learn English を参考にしようとした。一レッスン一ページ構成、Tom Brown でなく沖繩の地名、人名を使っている。米軍政要員が携帯していた『JAPANESE PHRASE BOOK』(WAR DEPARTMENT)一九四二年にならって四隅の角を落としていいる。急いでガリ切りをしたのか誤りが目につく。

・ガリ版教科書の印刷と配布

・体裁 用紙・藁半紙 20cm×29cm 綴じていない

原紙きりは字のきれいな喜久里が担当。有刺鉄線を鉄筆代りにし、原紙が破れ、再三、一からやり直した。印刷は最年少の宮城元助の仕事である。

「手廻しの輪転機五台で、あとからモーターつきが二台になりました。一日中廻し、原紙の破れと輪転機の故障には泣かされました。真玉橋先生のお嬢さんも手伝ってくれました。在籍生徒数分を数え、軍のトラックに載せ各学校に配りました。」

一年生の「ヨミカタ」は全生徒に、ゆき渡ったという声も聞かれるが、他学年ではクラスに二、三

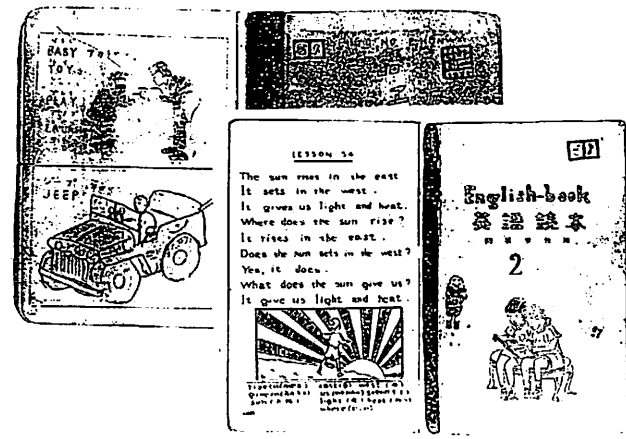
冊、あるいは先生だけが持っていたという声も聞かれ、科目、学年、地域によって配布状況は、まちまちで十分にゆき渡らなかったのが実情のようである。一九四七年から、文部省検定教科書が輸入されるが、社会科はまったく使えず、ガリ版教科書は一九四九年あるいは五十年頃まで使われた。

日本の教材をきびしく排除したが、私が国民学校三年で習ったサクラ読本の「海幸、山幸」がガリ版教科書三年用「よみかた」に採用されている。挿し絵も神代時代のそれで、どうみても日本そのものである。内容は問題ないから見逃したのであろうか。

沖繩独立論や、アメリカ帰属が叫ばれる中、沖繩文教部は、日本との絆を絶ち切り、ひたすら沖繩人のアイデンティティ確立を目指し、教科書の原稿を書いていたのであろうか。山城も仲宗根も日本本土で高等教育を受け、教え子は日本人として祖国に殉じた。彼らは日本を捨てることができなかった。「日本から独立して行こう」という考えは教育界にはなかったでしょ



うし、やはり祖国復帰を望んでいましたから。日本から離れて、皆が沖縄的なものを作るんだという強い決意があったかという点、それはなかったと私は思います」と仲宗根はいっている。



米軍政府が分離政策あるいは独立志向を支援する政策をとったにも拘らず、沖縄文教部は、たてまえはどつあれ、本土を志向していた。彼らは琉球人にはなれなかった。

註

1. 那覇市民 資料編第三巻八「市民の戦時・戦後体験記下」 二三八頁
2. 「米軍占領下の教育裏面史」仲宗根政善「沖縄現代史への証言 下」 沖縄タイムス社（一九八二年二月）一八七頁
3. 文部大臣前田多門は一九四五年九月三日、ラジオ放送「青年学徒に告ぐ」の中で科学的思考を強調。さらに「新日本建設の教育方針」（九月十五日付文部省通達）でも科学教育を説いている。やさしい表現についてはJohn, Bernard 大尉が有光教科書局長にマニュアル作成を指示した際（一九四六年一月二十一日）、「平易 二、簡潔にとっている。ハンナ少佐は二月上旬上京したとき、教科書編修のみならず、日本から分離された沖縄の文教政策に関し、C・I・E教育課員と意見交換したとみられる。
4. 「相思樹に吹く風」 一〇六頁 沖縄タイムス社（一九九二年二月十九日号）本シリーズは仲宗根の日記に基く。
5. 前掲 那覇市史資料編 二三八頁
6. 前掲「沖縄現代史への証言」 二七八頁
7. 宮城元助より電話で聴取一九九二年六月三十日 軍政府の調査では一九四六年四月現在の生徒数は（初等・高等）七万八千四百五十八名。教員が千八百七十三名だから、生徒の手に入らなかったのは当然であり「五十音も読めず書けず過ぎ」てきた。生徒がいても不思議でない。上沼八郎「沖縄教育論」（一九六六年三

月三十一日) 五頁

8. 文教学校付属川崎初等学校の研究授業(一九四九年十月二十一日第五時限、第六学年)の教材は「英語読本」第五十二課である。

9. 前掲『沖繩現代史への証言』一九三二―一九四頁 因みに、仲宗根は日本の教材を削れといわれ、骨身を削る思いで行って削ったと述懐している。(同書 一九一頁)

十八 学校教育の実態 元教員の証言

・伊波園子 平和資料館証言員

― 喜屋武岬で救われたのですか

伊波 最南端の荒崎海岸です。

― 姉が看護婦だったので、青酸カリの話は聞いていました。先生の本に青酸カリで処置しようとする場面がありますが

伊波 ある時衛生兵が何かやっているの、お伝えしましよかと申しましたら、もの凄いい剣幕で、日本刀をかざし追い返されました。今思うと、あの時青酸カリを入れていたんじゃないでしよか。

運よく生き残った鉄血勳皇隊員や特志看護婦員の戦後の第一歩は英語で始まった。フロム・エ

スタディ・ノーブレックファースト・ノーランチ・ワイアーオールハングリー

― 怪我されて病院で手当を受けられたそうで

伊波 宜野座の野戦病院で手当をうけ、九月までおりました。諮詢会の教育部もでき、もう学校も始まっています。

学校再開の経緯は収容地区によって異なる。名護市屋部村はかなり遅く、一九四六年二月である。学区内に住む教員や高等女学校・中学以上の教育を受けた人がかり出され、生徒を校庭に集めることから始まった。校舎は残っていないので木陰で思い思いに座って、先生の話をきき、地面に樺切れで文字をかいた。ドラム缶のふたを木につるし、やわらかいチョークで文字を書いた。

伊波は足の傷が癒え、一九四六年二月国頭村奥間初等学校一年生担任になった。木枯らしの吹く頃でした。屋根も壁も芽ぶきの上間の教室で、窓は吹きさらしだったので子どもたちは、首をちぢめ、足をたぐんで丸くなって授業を受けました。それでも半年前の青空教室、テント教室にくらべ隔世の感さえしましたと伊波は言う。

― ガリ版刷の「ヨミカタ」はありましたか。仲宗根先生のお嬢さんのお話ではクラスに一、二冊しかなかったようですが

伊波 全児童にいき渡っていました。辞典がないので、全児童に漢字の読み仮名をふってやりました。

―鉛筆は二人に一本、配給されたようですが

伊波 軍の方はラブレスさんで、ノートも鉛筆もわりに潤沢にありました。

―木の葉をノートにしたという人もいますが、収容地区によって大分事情が違うんですね。初等学校から英語を教えたはずですが。

伊波 一九四六年、奥間では一年生に英語を教えませんでした。

一九四七年、伊波は母の勤める屋部初等学校中山分教場に転任した。一年から四年まで在籍八十名の複式学級である。分教主任の母の給料は三百円、伊波が二百八十円、因みに牛缶詰（一・八kg）一個が八百円であった。

伊波 ここでは一年から英語がありました。六年で二の用法も教えました。

―英語の時数はどのくらいありますか。

伊波 週三時間です。

―テキストがあった筈ですが、あちらの米日会話集をもとに作ったらしいのですが。

伊波 ガリ版刷のテキストがありました。各学年一、二枚でいど、五、六枚まとまって教師だけが持っていました。

―さし絵なんかついていましたか

伊波 ついていません。表紙ありません。日常生活に使えそうなものを、子供たちに教えました。

テキストは殆ど会話で、段階を追って教えました。読んだり書いたりしません。のんびりした授業でした。父兄参観のとき全部英語でやりました。

―オール・イングリッシュですか

伊波 はい。ちょっとトリックを使いましたが、全部英語をやりました。

―敗戦直後、米軍が英語で教育をしたいとやってきたそうですが。

伊波 聞いておりません。ちょっとお待ち下さい。こんな本があります。『戦後沖縄精神薄弱教育のあゆみ』琉球大学平田哲、大城正文著興文堂（昭和五十一年三月三十一日）に、米国民政府は英語による教育を目論んだけれども、教育関係者の大反対にあい、その目論見は実現できなかった」とあります。

―なるほど、思いあたります。

沖縄戦記録

・中村文字 沖縄戦記録一フィート運動事務局

中村は本土からの第二次引揚げ者としてLSTに乗せられ、一九四六年九月十日、沖縄に上陸。一月二日付ガリ版刷の辞令を貰い、本部村新里初等学校に赴任した。「山から切り出したままの丸太の骨組みに屋根も芽ぶきの二教室で一棟の建物が四、五棟建っていました。建物はムカデの足のよう

に両側から無数の突張りを入れて、補強してあるので、あとでムカデ校舎とも呼ばれた、勿論床もなければ雨戸もない。雨が降ると教室の中は泥んこになった。窓にはかます（南京袋）を張り、伊平屋灘からまともに吹きつける寒風を、わずかながらでも防ごうと努力した。そのカマスのカーテンに落下傘のひもをほどいて草の葉や花の色水で染め分け、刺しゅうをする若い女教師もいて、胸が痛くなるほどに、いじらしい思いをしたものである。」

なぜか当時リビー、テラ、グロリアと台風が打ち続き、馬小屋校舎を吹き飛ばした。そのたびごと、マリアの病みあがりも嫌わず、父母が村中総出で修理にあたった。

― 机はなかったんでしょう。

中村 父兄の手作りでした。弾薬の空箱を腰掛けにしていました。

― はだしの写真をよく見ますが、やはりはだしで。

中村 はい。何もありません

「なんの施設もない運動場でHBTを改造しただぶだぶの服を着て、はだしで赤土をけて遊びまわっているのを見るのはつらかった。」

― 教科書はあまりなかった筈ですが。

中村 ガリ版刷の教科書。一年生の国語は全生徒に行き渡りました。間もなく本土から来るようになりました。

― ノートはありましたか

中村 軍からみどり色の野紙。タブロイド版の紙が配られました。それから塵捨場の紙を使いました。

― タイプの打ち損じの裏を使った人もいますから、そういった紙だったんでしょうね。

中村 黒板はベニヤ板を黒く塗ったもの。文教局からチョークが渡されましたが、ボロボロして使えないものでした。あとから本土から来ました。

― 英語の授業はどんなふうにしたんですか。

中村 皆、集ってどの程度教えようか話し合いました。Good morning, Good-by などの挨拶を教えました。教科書はありません。

― 弁当にイモを持っていったそうで

中村 干燥ジャガイモ、小指の先ぐらいのを持って行き、お湯でもどしました。さつまいもをふかしてキントンふうにつぶして食べました。大根でもなんでも食べました。イースト菌でふくらませて、ウエストバージニアの雲のようなパンなど言っていました。

― 衣類は、やはりHBTの改造なんかを

中村 ララ物資の配給がくれば、一族に何枚か布地が貰えました。古着のワンピースやズボンなども。野戦服にいろいろ手を加えましてね。茶色の一人用蚊帳を売りに来る人がいましたね。それを買ってワンピースやシミーズを作りました。

— 女物の靴はなかったようですが。

中村 二世の割に小さい靴が配給されました。そのうち松の木で掘立小屋を作るようになってから、残りの木で下駄を作り、H B T の切れればしを鼻緒にしました。

本土、台湾、サイパン島からの引揚げが進むにつれ、沖繩の人口は増加、それまで以上に食糧難に陥った。諮詢委員会や民政府を通じて、食糧配給の陳情が何度か軍政府に出された。ラッキーストライク一ポール B 軍票二百円なのに初等学校教官の給料が三百円、教員のなり手がなく、教職を去って、軍作業につく人が少くなかった。

中村は慣れぬ手に鶴嘴を持ち、よろめきながら戦車バルのアスファルトを掘起こし、藩苗を植え糊口をしのいだ。とりわけ幼な児をかゝえた女教師の苦労は筆舌に尽し難い。乳飲み子を背中にくゝりつけ、学校に行き、アオイソラ、ヒロイウミを教え、帰りには焚木を拾った。だれもが自分ひとり生きるのが精一杯で、他人事には手が廻らなかつた。乳飲み子をあずける余裕もなかつた。教師は何を思い、何を願っていたであろう。中村は次のように語っている。「本土から切り離された沖繩。これからどんな境涯がこの子らを待ち受けているか。先が見えないということほど人の思いを千々に砕くものはない。そんな大人の迷いをよそに嬉々と遊ぶ子どもたち。もうよそには頼れない。沖繩民族の前途は自ら切り開くしかない。艦砲の雨をくぐり抜け、強い生命力で生き延びてきたあなたたちではないか。自らの力でたくましく行け。子どもに言っているのか、自分自身に言いきかせているのか。」

熱い固りは胸を突きあげて涙になるのだった。」

敗戦から半年間、現代ではめずらしい無通貨時代、そして無文字、裸足、藪、茅ぶき小屋という原始生活を余儀なくされた。

宮古では日本の新聞や雑誌が時おり入り、教員はそれを貰って、日本について情報を得た。しかし本島では軍政府発行の「ウルマ新報」とわずかばかりの教科書が日本語で書かれた読物であった。人々は活字に飢えていた。しかし潰滅的打撃を逃れた国頭地方の塚の中には、何冊かの本が残っていた。

「戦争中、誰かが塚に避難させておいた蔵書を探し当てた職員が学校に持ってきた。泥水が浸みた箇所もあつたが、私たちにとって、命を養う栄養剤であつた。何冊かが次から次へと回し読みされた。なかには写経でもするように一文字一文字ていねいに写本する女教師もいた。夜の読書に、写本に、電気という有難い燈火があるわけではない。アメリカ兵が飲み捨てたビールの空き缶に重油を入れ、テントの切れはしを細く裂いて小さな縄をない、それぞれをさし込んで燈心にしただけのランプなのである。従って油煙たるやものすごい。読書を写本に時を忘れた人たちは翌日、鼻の穴や目のうちを黒くふちどりして出勤してくる。鏡がないので、ご本人はご存知ないからいいようなものである。

写本のノートはアメリカ軍から配給された大版の郵紙を適当に切つて綴り合せた手製である。泉鏡花の「高野聖」や有馬武郎の「幼き者へ」が写本された。とくに女教師の間をフルに駆け巡ったのは

パールバックの「母の肖像」であった。昼食時には読書感が語り合われ、貧しい弁当のさびしさを忘れさせた。」

注

1. 一九九二年八月二十三日 電話による聴取「ひめゆりの沖繩戦」岩波書店（一九九二年六月十九日）
2. 一九九二年十月十四日 電話による聴取『わたしの中の大正・昭和』（私家版）（一九九一年二月二十八日）
3. 沖繩戦で教え子を死なせた中村は「母の肖像」の中の「この子を戦場（南北戦争）にやるわけにはいきません」という自己主張のできる女の生き方に胸打たれ。後年婦人問題にとり組み、沖繩婦人連合副会長として活躍。なお沖繩の混血児の救済の手をいち早くのべたのはパールバックである。

十九 海軍軍政府による軍政総括

ハンナ少佐はムーレ大佐宛に提出した教育課の報告書の中で沖繩の教育の現状と問題点を次のように述べている。

一九四五年九月には学校数七十二校、教員千三百名、生徒数四万であったが、一九四六年七月一日現在では学校数二百二十七校、教員は三千二百五十三名、生徒数は十万八千二百八名に増加し、学校制度も整備されてきている。

F. 現在の諸問題

一九四六年七月一日には、沖繩の教育制度は記録の上で戦前のレベルにまで戻った。そして高等学校に通うことができないう青年のため、夜間や暇な時に教育を受けられるような補足的な青年学校の復興計画が進行中であった。しかし教育制度が期待されたとおりの成果をあげられるようになるまでには、解決されなければならない問題が多々ある。最も重要な問題は次の三つである。十分な校舎、教科書そして有能な教員の供給である。教員要請計画は既に進行中だが、教員は総じて若く未熟である。教科書は謄写版を使って学校が機能するに足るだけの量は作られていたが、冊数は僅かである。校舎はまだ十分でなく、約三万人の初等学校生徒と約千五百人の高等学校生徒がいまだにテントに、残りは改修された校舎、コンセット、骨組と茅葺き屋根、骨組と布製の建物に収容されている。

日本からの十萬五千人の民間人の引き揚げは、沖繩の学校制度に二萬五千人の生徒に当る付加的な重荷を課することになるだろうし、それに応じているいろいろな問題も増加することになるだろう。

七月一日軍政の移管式が沖繩側も出席盛大に挙行され、軍政の権限が海軍から陸軍に委譲された。交代はすでに四月十八日の諮詢委員会の席上ワトキンス少佐の口から明らかにされた。「ワトキンスは次の言葉で挨拶を結んだ「今日ガ諮詢会ノ終リデアル。数ヶ月愉快ナ感ジデヤツテキタ。此ノ集マリデ愉快ナ有益ナ事ヲ教ヘテクレテ有難ウ。今日マデ交ツテ一心ニナツテ再建ノタメニ一致シテ来タ。私ハ沖繩ニ来て満一年ニケ月ニナル。沖繩ハ愉快ナ幸福ナル家デアル。沖繩ニ滞在スル間交際ヲ続ケタイ。過去ノ精神ヲ基礎ニ於テ。」 四月十八、二十六日のワトキンスの発言は政治上興味つきな

いものがある。軍政が陸軍に代ることに關して軍民とも不安を感じてした。ワトキンスは事あるごとに陸軍もアメリカ軍人だからと親が子を諭すよう気を遣っている。交代が正式に発表されたのは五月二十日である。ワトキンス「軍政ハ海軍カラ陸軍ニ移ル。之ハ多分七月一日カラダロウ。本日之ガ発表サレタ。陸軍政府ノ責任デ、将校ヲ全部陸軍ニナル。私ガ居ル中、沖繩建設ニ力ヲ入レタ理由ガ分カルダラウ。陸軍ハ沖繩ヲヨク知ラナイカラ、沖繩民政府ヲ作り上げ、沖繩ヲ知ラシメルヤウニスル。之迄早く早くト急ガシタ理由ガ分カルダラウ。」ハンナとても同じ気持ちであった。

マードック、ワトキンス、カウドウエル、ハンナ、バンダビルト等海軍軍政府の首脳の大半は博士号をもつ大学教授で、文字どおり沖繩再建の理想に燃えていた。彼らは一九四五年四月一日まで何も知らなかった。しかしボロをまとった骨と皮ばかりのオキナワンが優しさとしなやかさ、そして英知をもった人達であると悟るのに長い時間を要しなかった。英文学者のハンナ少佐はいつも丸腰で、沖繩の芸術家を育成し、文化財の収集に盡力。芝居の鑑賞には、正装して臨んだ。少佐は沖繩について何も知らない陸軍の落ちこぼれども(Flankies)のために「History of Okinawa」を書いたり、ハンナ文化センター（東恩納博物館）の運営資金を集めるための解説書「Okinawa Exhibit」を書いたりした。また米国教育使節団報告書を手し、山城に与え、沖繩の新しい教育について語り合った。ハンナは学者であり、山城も広島高等師範英文科出身の元校長で、ともに教育行政については素人であった。しかし互に尊敬と信頼で結ばれ、本土CIEと文部省にみられた圧力と不信感はなかった。沖繩側は

自由な雰囲気の中で、いろいろ意見を述べ提案した。ハンナ少佐は対日監視基地という軍の統治方針に抵触しない範囲で、山城らの具申を最大限に実現しようと努力した。ハンナは自分の業績を語ることを好まない。この点に関する私の問いかけに「沖繩の教育の再建は、沖繩人自身がやったことで、私がやったこと、言えば、たゞ彼らに手を貸したただけでした。」と答えるのみである。

灰燼の中から、共に再建の盡したワトキンス、ハンナ、ローレンスの帰国にさいし、志喜屋知事は感謝状を贈った。

この一年二ヶ月が一生の中で最も輝いた時期であったのか、ワトキンス、カウドウエル、ハンナ、ローレンスは、沖繩に対し、変らぬ愛情を持ち続け、終生交誼を持ち続けた。

沖繩復興の歩みはドルの雨が降るまで遅々として進まなかった。米本国の沖繩の将来の地位に関する取扱いが定まらず、現地軍政官はさまざまな障害と戦わなければならなかった。ワイス Leonard Weiss は彼らが直面した最大の障害として次の五つを挙げている。

- (1) 十分に訓練された軍政要員の欠如
- (2) 沖繩方言（日本語）と英語の言葉の壁
- (3) 日本及び沖繩とその他の琉球諸島の軍政の実施にあたり、陸軍と海軍の間に生じた権限分担上の混乱
- (4) 沖繩及びその他の琉球諸島が政治上、最終的にどう取扱うか決まっていなかったこと。

(5)復興に不可欠な資材、補給、施設、設備が不足していたこと。
 日本占領に設え、米陸海軍省は軍政学校、民事訓練学校、情報言語学校等で多数の軍政要員を養成した。沖繩では一九四五年七月現在将校四百九十八名、下士官二千三百八十九名計二千八百八十七名を数えた。しかし沖繩の将来について国務省と軍部が議論をしている間、補充の目途もつかぬまゝ、日本本土や朝鮮半島の軍政につくため、あるいは帰還し、一九四六年七月には僅か四十四名に激減してしまった。

(4)について文教面では前述の「沖繩人を二級米国人として訓練すべきか、日本人にすべきか」というハンナ博士の言葉が余すところなく語っている。星條旗に囲れ、アイデンティティー不明のまゝ育てられ、自分をアメリカ人と思い、後年東京を訪ね第一生命ビルの星條旗を見て、ここにも沖繩の旗があると叫ぶ子供も出るようになる。

註

1. ハンナ夫人より私信 一九九三年九月十四日付
2. "Military Government on Okinawa" FAR EASTERN SURVEY 二二七—二三八頁
3. 『戦後沖繩経済史』 琉球銀行編 二五頁

(あとがき)

従来の戦後教育史はその上に本土の二字を冠したものであった。小論はとかく不鮮明であった沖繩占領直後の混乱期に光をあて、その全体像を模索しようとするものである。浅学の上、琉米の資料が不十分のため、全体像は大きくゆがんでしまった。

ところでアメリカの対日占領教育政策には、いわゆる教育の民主化とバックスアメリカーナの構図に組み込もうとする戦略的思考が内在していたとホール博士は言っておられる。

沖繩の場合には陸軍省の直接統治ということで、それはむしろ顕在していた。今後は日本の中の沖繩として、沖繩から日本本土の教育を見直す作業も必要である。手許のワトキンスコレクション(フーパー研究所)の目録を見ると、小論の書き直しは必至である。執筆中、ハンナ博士の訃に接した、心から冥福を祈りたい。

一九九三年十二月七日